



長瀬高浜遺跡 IV

天神川流域下水道事業に伴う

砂丘遺跡の発掘調査概報(3)



寄贈



1981

財団法人

鳥取県教育文化財団



0.2
t
0)

序　　言

天神川浄化センター建設工事に伴う長瀬高浜遺跡の発掘調査が始まられてから今年度は4年目を迎えたが、4月の中部埋蔵文化財調査事務所の発足や8月の事務所・倉庫の移転等があったのに加えて冷夏・豪雪等、天候にも苛なまれ、多事多端な年度であった。本年度の調査区域は全体の調査計画区域の中のほぼ中央を南から北に向けての地区と1号墳周辺地区とで、浄化センター管理棟や汚水処理棟の建設を横目に見やりながらの作業であったが、調査員・作業員とも、積み重ねた経験と技術を生かし能率的に発掘調査に当り予定の調査区域の発掘を完了する事ができた。

年度中発掘が進むにつれて集落跡・墳墓・埴輪群等が続出し、その種類数量は多種多様であって長瀬高浜遺跡が古代文化究明のため貴重なものである事が再認識された次第である。尚今年の発掘にも大きな期待を寄せている所以である。この調査に当って、多くの方々の御指導・御援助と御協力を戴きましたことに深く謝意を表します。

昭和56年3月31日

中部埋蔵文化財調査事務所所長　米原幸正

例　　言

本書は天神川流域下水道事業にともなう埋蔵文化財発掘調査の昭和55年度の調査概報である。財団法人・鳥取県教育文化財団が県土木部下水道課の依頼を請けて発掘調査を実施した。期間は昭和55年4月9日から昭和56年3月31日である。

調査の実施にあたっては鳥取県教育委員会文化課の指導を受け、各大学・研究機関の考古学専門家の観察等による助言・協力を得た。特に埴輪群については、花園大学教授伊達宗泰先生、奈良大学助教授水野正好先生に丁寧なる御指導を受けた。

本書は、教育文化財団の調査員・補助員全員による協力で作成した。研究ノートについては執筆を記しておくが、これも全員の協力の上に成り立ったものである。

調査にあたり多くの方々から助言・協力を得た。主な方々について記して感謝したい。
石野博信、泉森　皎、伊藤勇輔、今尾文昭、小笠原好彦、小川良太、小田富士雄、
加古千恵子、勝部　衛、龜田博司、川原和人、楠元哲夫、久保猿二朗、小鶴芳孝、
小林行雄、小原貴樹、近藤義郎、佐藤興治、真田広幸、佐原　真、沢田正昭、鹿田安信、
駿　龍雄、杉谷愛象、杉原和雄、伊達宗泰、田中　琢、千賀　久、富長源十郎、中井一夫、
永瀬優理、長友恒人、中野知照、名越　勉、丹羽佑一、畠中小太郎、平川　誠、深沢芳樹、
福島正実、堀田啓一、松本達之、松本岩雄、水野正好、三宅博士、村上　勇、森　浩一、
森下哲也、吉田芳之、小谷浩二



形象埴輪群



甲冑型埴輪



入母屋式家型埴輪



四注式家型埴輪



盾型埴輪 1



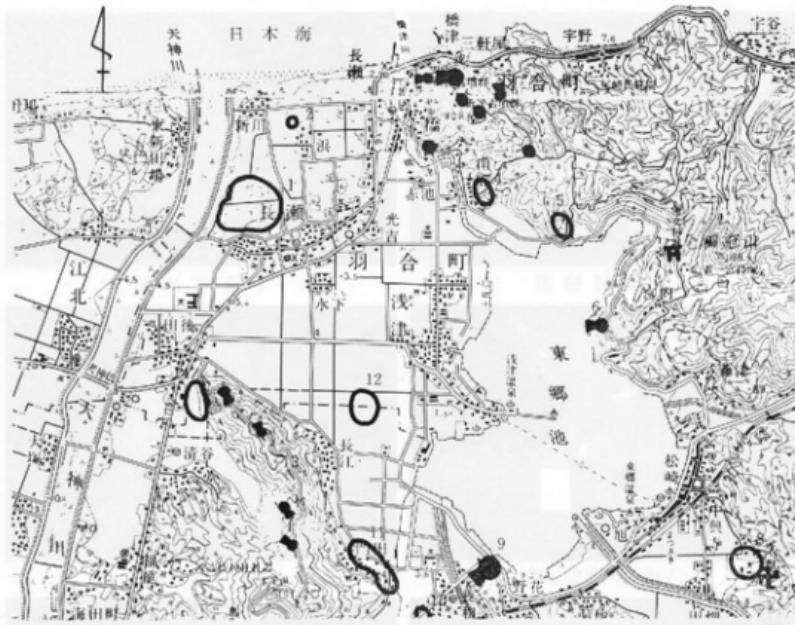
盾型埴輪 2



蓋型埴輪



円筒埴輪



插図 I 長瀬高浜遺跡と周辺遺跡

遺跡地名

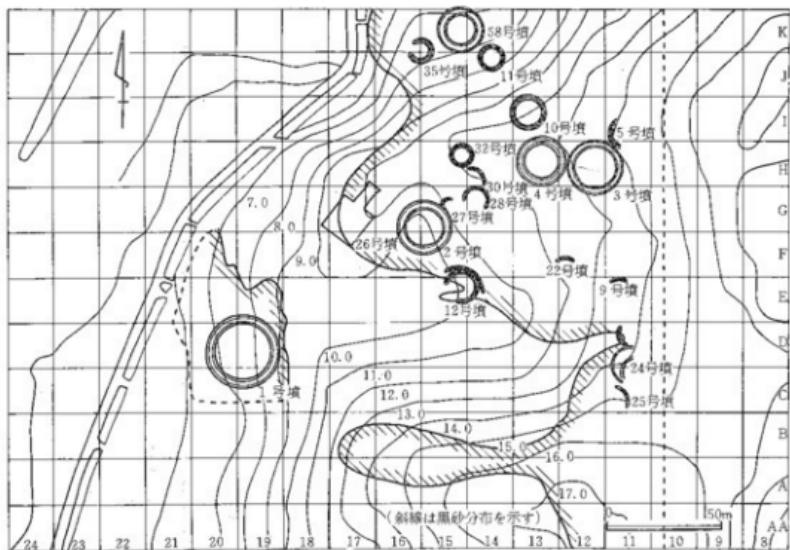
1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北造跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ヶ谷遺跡
6. 宮内孤塚古墳
7. 倭文神社（伯耆一の宮経塚遺跡）
8. 久見廃寺
9. 北山1号墳
10. 長和田・津浪遺跡
11. 門田遺跡
12. 暢ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡



写真 I 長瀬高浜遺跡航空写真

第1章 長瀬高浜遺跡の立地

長瀬高浜遺跡は鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜^{はね}にあり、天神川河口近くの右岸に位置する。羽合町は鳥取県中部の人口6,827人、面積12.41km²の町で、東を東郷池に面し、その東から日本海につきだす馬ノ山丘陵上には、推定110mの馬ノ山4号墳他22基を数える馬ノ山古墳群がある。この時期（4世紀後半～5世紀前半）、天神川は現在の国道9号線沿いに橋津方面に流れていたと推定されるが、その古天神川の北に位置する長瀬高浜遺跡は、西方の北条砂丘より連なるやや小高い砂丘台地上にある。この砂丘台地は現在の天神川により東西に分断されている。この砂丘台地には砂丘活動の停滞した時期があり、その時期に形成された黒砂層が遺構遺物を包含している。その時期は弥生時代前期～中世におよぶが主として古墳時代前期後半から中期後半にかけて栄えた遺跡である。



挿図2 長瀬高浜遺跡黒砂分布図

第2章 長瀬高浜遺跡の調査経過

昭和49年5月県教育委員会による国道9号線北条バイパス建設に伴う現地での分布調査により高浜の砂丘地に多数の土器が散布しているのが認められ、当地域における『天神川流域下水道事業天神净化センター』建設に先だつ調査が実施されることになった。

1. 試掘調査（52年度）

試掘による調査は52年8月から、財団法人鳥取県教育文化財団により県土木部下水道課の委託費に依って開始された。調査対象地は施設用地10ha内の第1期工事予定地分約5haとされた。調査方法は $5 \times 5 \sim 10 \times 10\text{m}$ のグリッドを32ヶ所、計 $3,000\text{m}^2$ にわたり掘り下げた。その結果、古墳1基、箱式石棺6基中世火葬墓25基の他多数の弥生土器、土師器を検出した。

2. 53~55年度本調査

試掘調査に基づき関係部局と協議されたが計画は変更されず、遺構・遺物を含む黒砂層面について上記試掘調査地区と東部の黒砂面、及び中央管理棟予定地下層から検出された五輪塔を含む黒砂面（緊急調査地区）の調査が実施された。1号墳主体の箱式石棺より「つづらさわ巻き」の鉄刀を副葬した25才~40才頃の女性人骨が発見され駆がれた。

54年度は東部の黒砂面の全面発掘調査が行なわれ多数の住居跡と3・4・10号墳をはじめとする古墳・墳墓が確認された。地区的南端区域では水田面と考えられるグライ土壤も検出された。この地域では竪穴住居跡75棟、堀立柱建物跡10棟、古墳15基、土壙墓9基、石棺墓7基等が確認されている。

55年度は中央部の調査が行われた。ここでは2号墳をはじめ円墳8基、石棺墓7基の他、前方後方墳、さらに下層からは弥生時代前期の土壙墓群が検出された。古墳時代の住居跡も多数検出された。



写真2 1号墳主体部



写真3 屈葬墓



写真4 竪穴住居跡

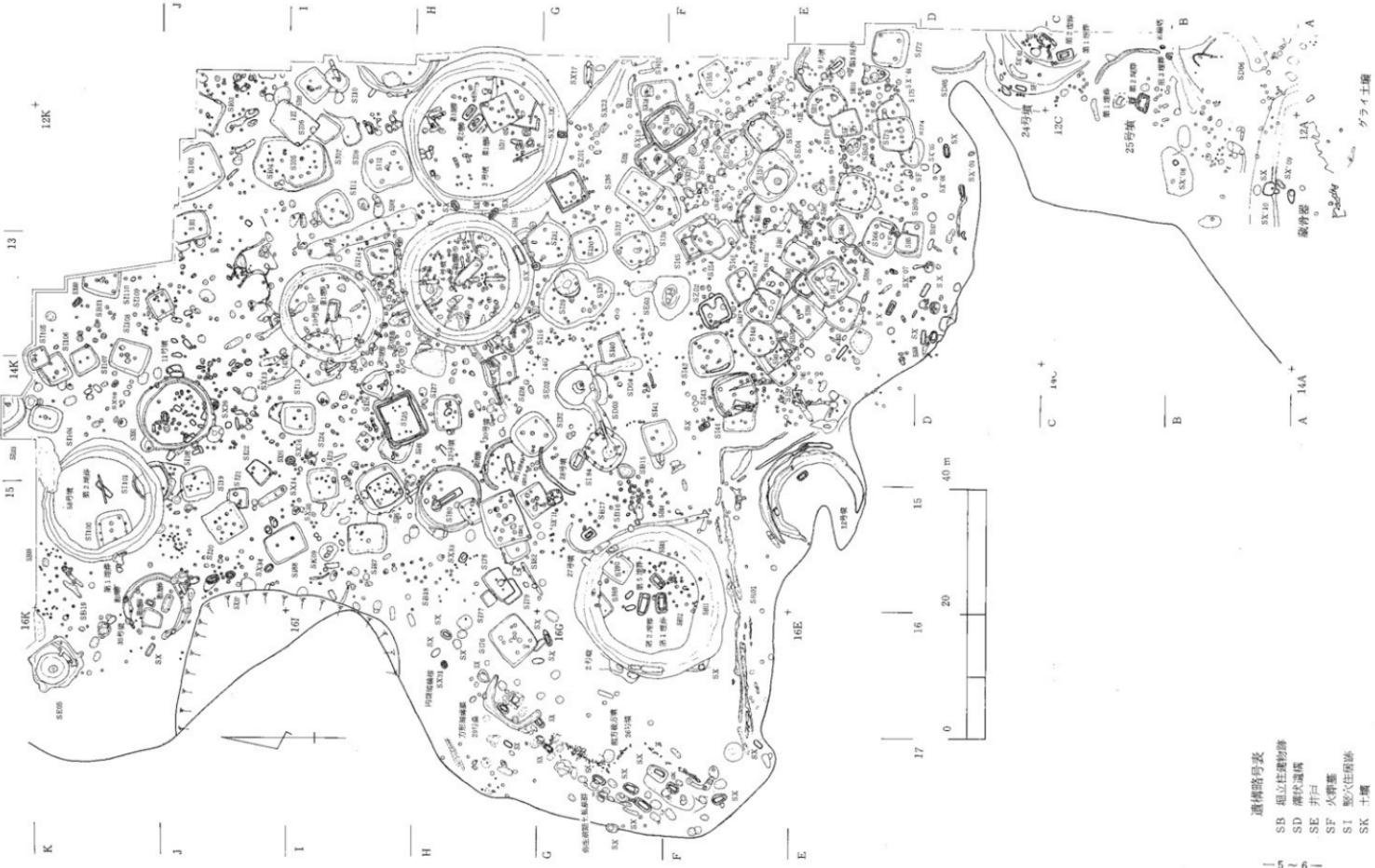


図3 長瀬西浜遺跡全体遺構図

注 AA ラインより K ラインまで、11 ラインより 17 ラインまで。

12 13 14

第3章 55年度の発掘調査の結果

55年度の発掘調査は、54年度調査地区の西側及び北側の一部の約8,500m²について行った。また工事の関係から、56年度調査予定地区の1号墳下層及び周辺地区1,600m²についても調査を行った。立地的には西が高く東が低い地形で、遺構・遺物を包含している黒砂層は西側の高所を風で吹きとぼされている部分があった。北側の一部1,200m²については工事用道路及び機材置場として使用され、残土が多量にあったため発掘に困難をきたした。

発掘調査で検出した遺構は、堅穴住居跡35棟・掘立柱建物跡11棟・井戸状遺構1基・溝状遺構2基・古墳9基・石棺墓7基・木棺墓3基・埴輪棺墓8基・屈葬墓1基・方形周溝墓1基・弥生時代前期土壙墓42基・埴輪祭祀跡1基等である。地域的には、54年度調査地区の北側に集中していた堅穴住居群が西側と北側に伸びており、集落の西端を確認することができた。また墳墓については、以前から多く出土していた弥生時代前期の土器群や管飞等にともなって、土壙墓・木棺墓群が西側高台に集中して検出された。またその直上から長瀬高浜遺跡で初めての前方後方墳（全長約30m）を掘り出した。残存部は葺石最下部の楓石列が東側に一列だけであったが、円筒埴輪棺や家型埴輪片もみられた。円墳は2号墳をはじめ8基を調査した。どの古墳にも1～2基の小型石棺をもっており、53年度調査の1号墳も周辺調査の結果、11基の小型石棺と4基の円筒埴輪棺がともなうことが判明した。このあり方は、地方の中小規模古墳の埋葬形態を示す良好な1例とみられ、今後の古墳発掘調査に1つの指針を提供したといえよう。また、古墳外の墳墓については石棺7基・木棺3基・円筒埴輪棺1基があり、方形周溝墓も1基みられた。16K地区の埴輪群の出現によって、埴輪は古墳から出るものとの従来の考え方を大きく変更する必要が生じた。特に形象埴輪群が集中して出土した点は古墳以外の祭祀の場が存在したと考えるべき良好な資料である。甲冑埴輪が上から下までつながったことは今回が最初のことと思われる。この埴輪群については、今後に発刊される報告書に詳細をゆずるが、速報として写真を掲載した。その下層には5例目の井戸状遺構がみられる。この井戸状遺構の埋没後に埴輪群が立てられており、埴輪と井戸の関係は現在のところよくわからない。

遺物としては、多量の土師器をはじめ、須恵器・弥生土器・陶磁器・石器・鉄器・銅器・玉類等が相交らず出土している。特に素文鏡が祭祀跡とみられる場所の他、初めて堅穴住居跡内から2面出土した点、前代に比べて祭祀形態が多様化したことを見かがわせる。また鉄劍型銅劍の出土も、銅鏡・銅製品と共に素文鏡と同じ機能を持っていたとみられる。土器は各堅穴住居・古墳とも完形品を数多く検出したが、その中でも製塙土器の小片・把手付カップ形須恵器・弥生時代前期の木葉文・重弧文をもつ壺など特筆される。中期の磨製石劍も出土し、わずかではあるが欠落している時期の資料も出土してきている。

1. 積穴住居跡 (S I)

A. S I 93 (挿図4・5、図版1)

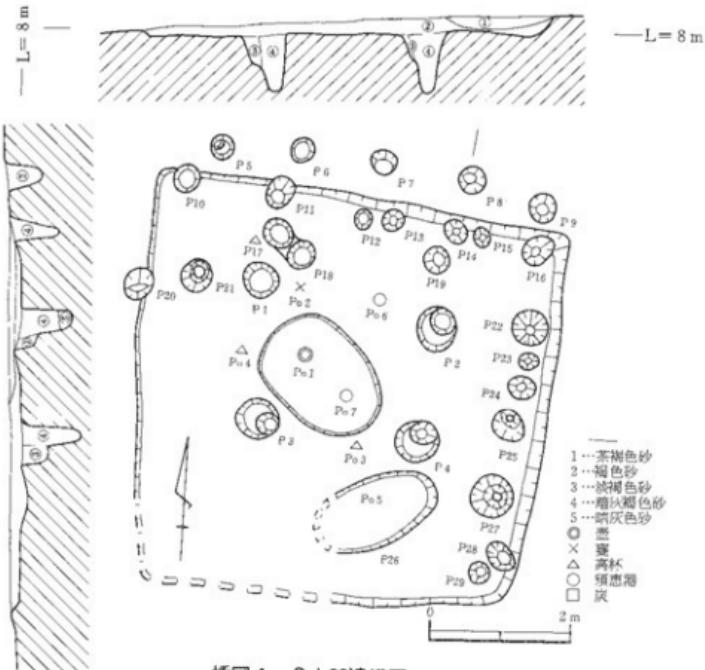
19Eと18E地区の境で、S I 94の北東とS I 98の南西に位置します。平面プランは方形で、床面は長辺で5.7m・短辺で5.6mを測ります。柱穴は4個でP 1から順に(38×34—44)・(34×31—42)・(35×36—45)・(40×32—30)cmを測ります。中央には(184×133—2)cmの浅底の土壇があります。住居跡内には20個のピットがあり、住居跡外には5個のピットがみられます。但し、P 26は柱穴というよりは浅底の土壇と考えたほうがよいと思います。これらのピットは北と東に多くあることから、S I 94と切りあってはいるものの出入口が南あるいは南西側にあったものと予想されます。また、住居跡外の5個のピットは住居跡を支える小柱というよりは、風よけの柵などを建てた柱穴ではなかったかと考えます。

出土遺物には、土師器の壺・甕・高杯、須恵器の高杯・甕・器台などがみられます。P O 1はわずかに内湾気味で、頸部は直立する複合口縁をもちます。稜は丸味をもち、内外面ナデ仕上げです。P O 2は口縁端部がナデられ、稜は丸味をもち複合口縁は退化気味になります。内面左から右方向のヘラ削り、外面横ハケです。P O 3は口縁端部は角ぼりながらも丸味をもち、内面丁寧な横ナデの後ヘラ磨き、外面はハケをナデ消しています。P O 4はP O 3に比べ杯部がより外反して広がる器形で、杯下部に一段稜がつきます。内面ヘラ磨き、外面ハケの後横方向のヘラ磨きです。P O 5は小型の甕で、外方に広がる口縁に頸部がすぼまり肩の張る器形です。口縁端部はナデられ、稜は鋭さに欠けます。内面粘土の絞り目の後ナデ、外面ナデです。内外面ともに灰釉がみられます。P O 6は小型の高杯で、口縁のたちあがりは外方に広がり、稜は鋭さに欠け内面ナデ、外面カキ目で一部灰釉がみられます。P O 7は大型の高杯形器台で、口縁端部は凸唇をもつあまり鋭さはなく手描きの波状の組紐文をもちます。内外面ナデ、全体に灰釉がかかります。これらの遺物からS I 93は古墳時代中期中葉（青木雅新）と考えられます。

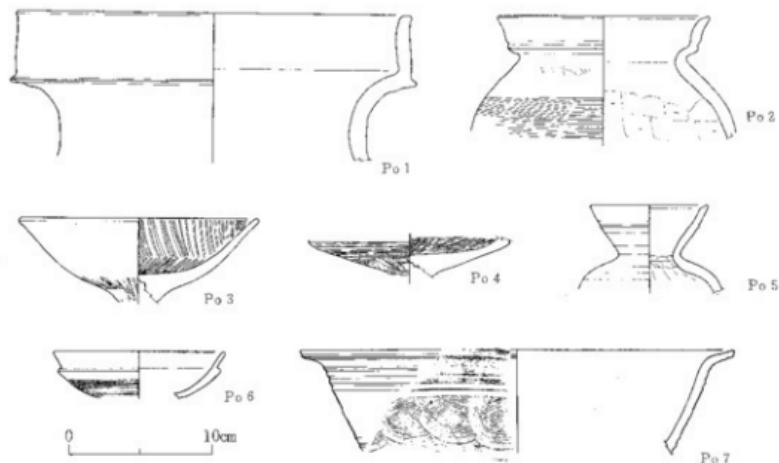
B. S I 88 (挿図6～8、図版1)

15I・15J地区にまたがって位置し、すぐ北には小型石棺墓S X 34、南東に同じくS X 38があります。平面プランは方形で、床面の大きさは長辺5.70m×短辺4.40mで、床面積25m²です。壁高は南西側で最大値0.68m、北東側で最小値0.36mです。柱穴は2個検出しました。プランはP 1(45×44—44)、P 2(60×57—50)cmで、P 2においては柱痕と思われるもの(21×22—24)cmを検出しました。柱間距離は2.65mです。特殊ピットなど、他のピット類は検出できませんでした。

遺物は床面上部から多数検出できました。実測・取り上げした内訳は、甕(完形3個、復元可能37個体、一括179袋)、壺(復元可能2個体、一括16袋)、高杯(完形1個、復元可



插図4 S I 93遺構図



插図5 S I 93遺物図

能9個体、皿の完形5個、一括68袋)、器台(完形1個、半完形1個、一括18袋)、ミニチュア器台片1個、小型丸底壺(完形7個、復元可能1個体、一括115袋)、コシキ型土器1個(完形品)、鉢型土器片1個、低脚杯(一括2袋)、その他土器(一括6袋)、スラッガ1個、鉄片2個、磁石2個、軽石2個、スミが多少、以上を検出しました。

甕(P01)は複合口縁で、口縁端部は斜めにカットされており、シャープさを残します。肩部には櫛状工具で右上りの斜線が入ります。内面底部は指頭圧痕が著しい。

壺(P02)は斜めに開く複合口縁で、端部でやや外反し、胴部中央付近まで横方向のハケ目が見られます。内面はヘラ削りが行なわれ、底部付近は指頭圧痕が著しい。

高杯(P03)は、丸味を持ちながら外方に開く浅い杯部と、長い支柱部から「ハ」の字状に開く脚部をもっています。口縁端部はやや面を意識しながら丸く終っています。

器台(P04)は、受部中央部で鋭く外反し、受部内外面とも横方向の磨きが見られます。脚部は受部と接合している所よりロート状に広がり、脚部下部に3個の透し孔が見られます。脚部上部には、横方向に磨きが見られます。

器台(P05)は、外方に大きく開く受部・脚部を持っています。口縁端部は薄く丸く終ります。外面及び受部内面はヘラ磨きです。受部内面はヘラ磨きの後放射状の暗文が見られます。脚部内面は削られているが痕跡は頗るではない。

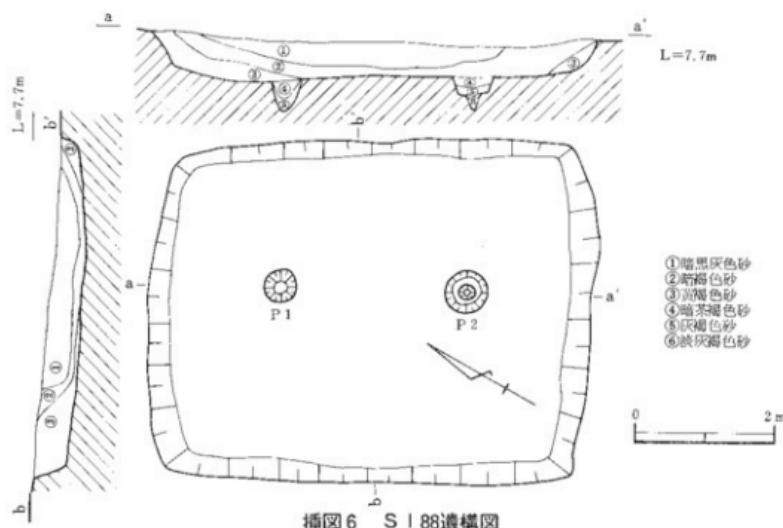
小型丸底壺(P06)は、内湾気味に開く口縁をもち、口縁・胴部上部は横方向の磨きが施され、下部にはハケ目が見られます。口縁内部はナデ調整です。

小型丸底壺(P07)は、口縁・胴部上部がナデ調整で、下部一面にハケ目がみられます。口縁内部はナデ調整で、胴部はヘラケズリが施されています。

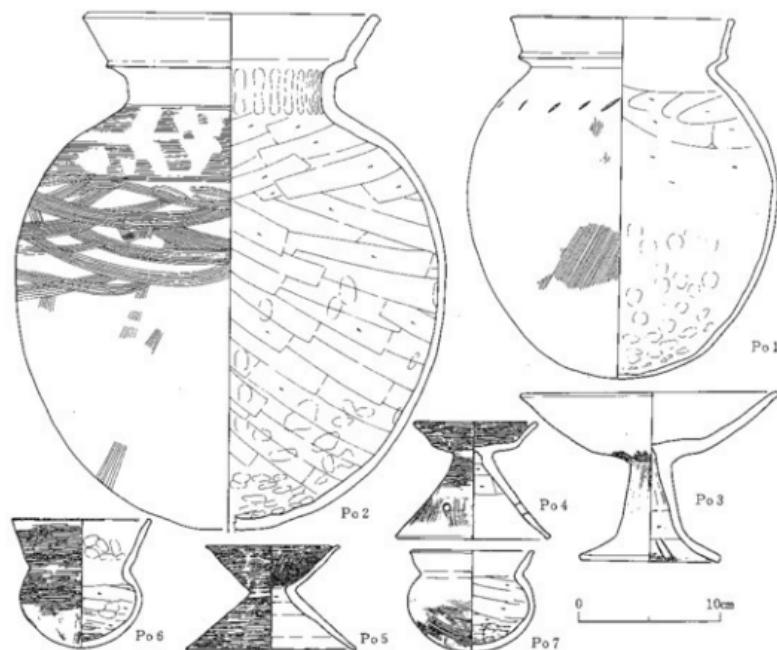
コシキ型土器(P08)は、口縁部の外面をハケの後ナデ仕上げ、内側はナデ仕上げで、胴部は外面縦方向にハケ目、把手部はあらいハケ目が残っています。内面はヘラケズリです。下部外面はタガ状の凸帶部をていねいにヨコナデしてあります。内面は端部近くまでケズリの今まで指頭圧痕が残っています。把手は上部で縦の環状把手を一对つけ、下部で横に環状把手をつけてあります。内面上半部にはススが付着しています。

これらの遺物からS I 88は古墳時代前期後半(青木Ⅶ占)の建物と考えられます。

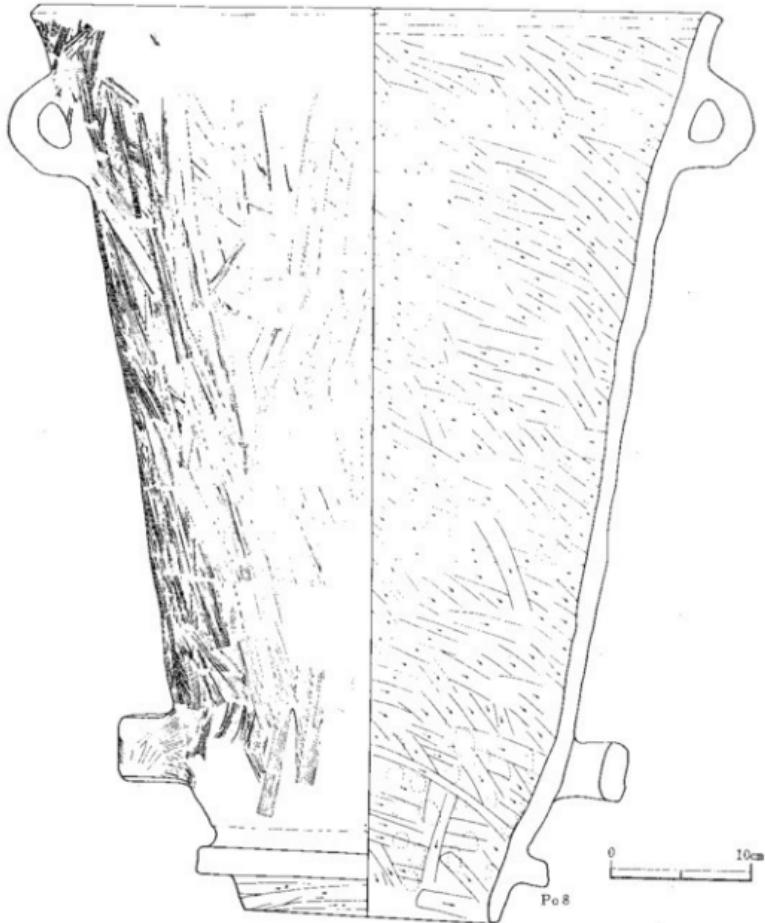
これらの土器は、量が多すぎるので一度に一軒の家族で使用したものでないと考えられます。また土器が竪穴上部にギッシリと詰まって検出されたことから、この住居を放棄して移動する際使用可能なものであっても打ち捨てたと考えるべきでしょう。裏返せば土器を持って移動するにはあまりに遅い所だったということが考えられます。またこのS I 88は周辺のS I 20・22・85などと同様に北西—南東に主軸を持っています。当遺跡全体から見ても、この方向に軸をとるプランの住居跡が多いことから、当時もこの方向からの季節風をさけようとしたのではないでしょうか。



插図6 S I 88遺構図



插図7 S I 88遺物図1



挿図8 S I 86遺物図2

2. 挖立柱建物跡 (S B)

掘立柱建物跡は調査区南側、2号墳墳丘下付近で7棟、北側埴輪群の東側で3棟、他1棟の計11棟がみつかりました。通算すると21棟になります。内訳は2×3間1棟、2×2間3棟、1×4間1棟、1×3間1棟、1×2間13棟、1×1間1棟、総柱の2×3間1棟です。建物の時代は古墳時代前期後半から中期前半の時期と考えられます。

A. S B13 (挿図9、図版2)

15G南西グリッドの南西、2号墳墳丘下の東よりに位置します。S I 89・90の南で、S B11の北側、S B14・15・16の西側になります。主軸はS B11とともに北西・南東軸で、梁間1間、桁行2間の建築物です。桁行長3.3m、妻通長2.6mを測り、床面積は9.9m²です。柱穴はP1から6を数えます。各柱間距離はP1から1.31・1.55・1.40・1.41mを測ります。柱穴底の絶対高はP1から海拔4.99・5.00・4.98・4.93・4.97・4.97mを測り、その差はわずか7cmです。

各柱穴プランはP1より(41×48-31)(46×45-28)(46×43-56)(61×82-60)(47×52-48)(43×46-48)cmです。少量の遺物より古墳時代前中期のものと思われます。

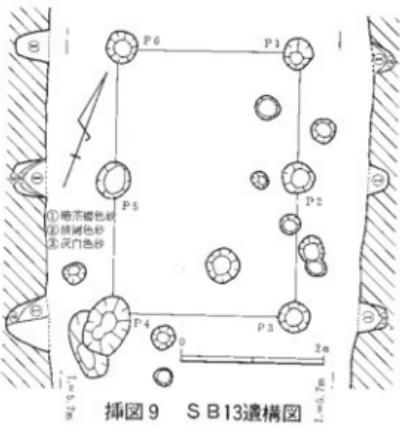
3. 古墳(SX)

A. 2号墳(S X02) (挿図10~14、図版2・3)

2号墳は16F地点をほぼ中心とする円墳です。西方には26号墳(前方後方墳)、南東方向に12号墳(円墳)を望み、北東部には27・28号墳が存在します。12号墳の北東周辺では銅剣が出土しました。規模は直径21m、周溝底より高さ3.2m、周溝総長は約24.8m、周溝幅は最長で5.5m、墳頂で標高は7.4mです。2号墳の東方の砂が風で飛ばされ地形が変化しているので断定はできませんが、現地形でみると西南部よりゆるやかに続く谷を削って周溝とし、盛砂をして古墳をなしたと考えられます。

埋葬施設は墳頂で5基検出されました。第1埋葬施設は箱式石棺で、第2埋葬施設と古墳の中心をはさんで、同じように主軸を東西にとっています。須恵器蓋杯枕を使用している事が注目されます。第3・4埋葬施設は木棺墓で、南東部に供獻の須恵器蓋杯がありました。第3・4埋葬施設は土壙墓で、2号墳北部にそれぞれ北西一南東の主軸をとっています。西の方に第3埋葬施設です。第5埋葬施設は木棺墓で、墳丘東部にあり、主軸を北東一南西にとっています。形態は第2埋葬施設と似ており、同様に供獻の須恵器蓋杯がありました。蓋杯は第1・2・5埋葬施設から検出されました。墳丘上からも短頭壺、杯などが出土しています。これらの遺物によって、2号墳は「陶色」の須恵器編年のⅡの3~4型式の時期、即ち6世紀の後半代のものと推定されます。(P01~3)

2号墳の特徴は古墳時代後期にも箱式石棺を使用している事で、これは砂丘であるため横穴式石室を構築しにくいという地理的条件のためかもしれません。また他に埋葬施設の



挿図9 S B13遺構図

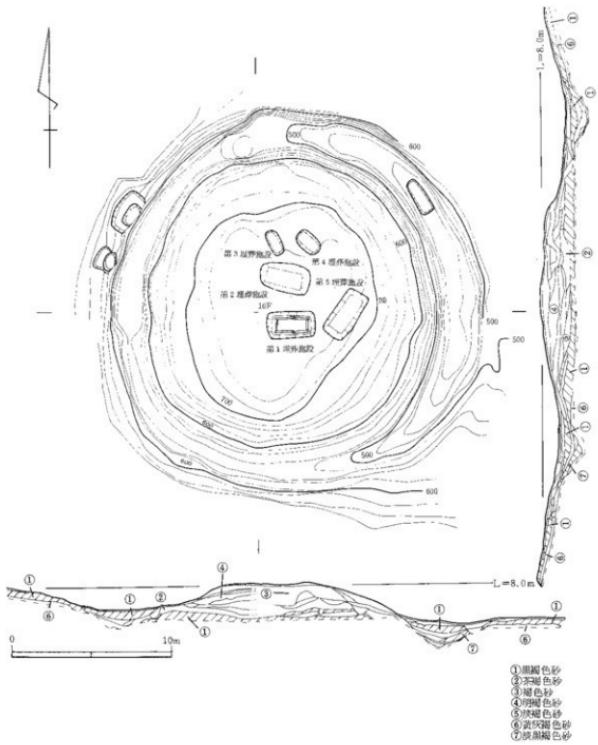
主軸が一定せず土壙墓があるなど不整一である事もあげられます。長瀬高浜遺跡で調査した円墳としては1号墳に次いで2番目に大きいもので、後期の古墳としては高浜では最大級です。立地的にも前期の集落群の上に構築されていること、さらに西側と南側のやや小高い丘が窪む谷あいのような地形につくられていることなど興味深い点です。このような意味で2号墳は長瀬高浜遺跡における古墳時代墳墓の比較的新しい時期を知る1つの座標になると思われます。

(1) 第1埋葬施設（挿図11・14、図版2・3、P.4～17）

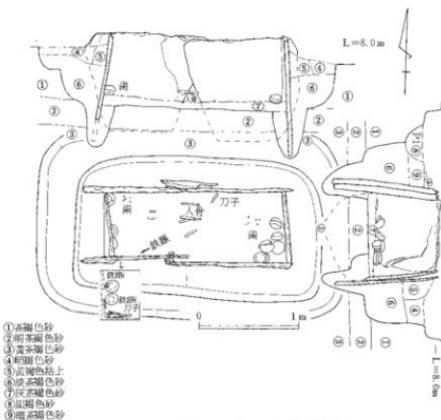
第1埋葬施設は2号墳墳丘のはば中央にある箱式石棺である。棺内の大きさは175cm×71cm×60cmで、長瀬高浜遺跡では規模の大きな石棺である。側壁各2枚小口各1枚で、蓋石の枚数は破損がひどく不明である。主軸はほぼ東西方向である。蓋石上には、須恵器短頸壺がおかれ、その短頸壺は底部が欠け、その底部は墳丘斜面で検出された。棺内には東側中央と西側北で歯數点が検出され、人骨も遺存はよくないものの、少なくとも2体以上が入れられたことは確定である。副葬品は須恵器14（いずれも蓋杯）、刀子2、鉄鏃8が検出された。須恵器は、東小口の中央あたりに、蓋ばかり3つでV字状の枕として使用されているもの、その南に蓋と身をあわせたもの3組、その上にのせた2つの計8点が置かれ、（蓋と身をあわせたものの中からは何も検出されず、蓋杯自体を副葬したものと思われる）西には北すみに1つ、南よりに2つが置かれている。（北すみの蓋杯付近で歯が検出され、これも枕として使用したのかもしれない。南側の2つもV字状にはなっていないが、枕の可能性がある。）

刀子は、1つは棺中央北側で検出されたが、もう1つは西小口南側に集中している鉄鏃群とともに検出されている。鉄鏃は平根式鉄鏃が西小口中央南よりの蓋杯の上におかれている。他はほとんど西小口南すみに集中している。（F.1～F.4）

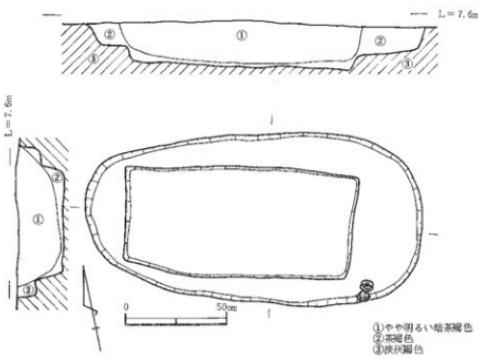
須恵器は「陶邑」編年によればⅡの4の時期と考えられ、埋葬施設の作られた時期が推定できる。古墳時代後期後半に鳥取県中部では蓋杯を副葬した古墳が多く、蓋杯副葬が当時の一般的な副葬儀礼であったと思われる。蓋杯と鉄鏃の副葬が多いことから、当時の死生観を推測することはできないであろうか？死生観という点では、この箱式石棺は内側にベンガラを塗り、かつ東側須恵器群のあたりは特にベンガラが濃い（死者の頭部にベンガラをたらしたものと思われる）ことも注目される。



插図10 2号墳墳丘実測図



插図11 第1埋葬施設構造図



插図12 第2埋葬施設構造図

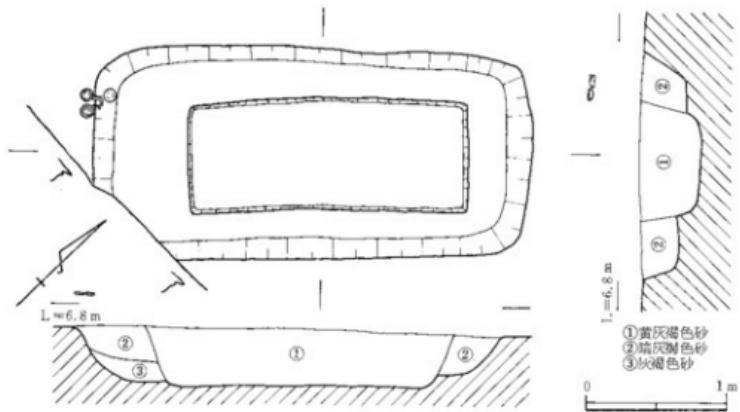
(2) 第2埋葬施設（挿図12・14、図版2・3、Po18～21）

2号墳墳丘の北寄り、第1埋葬施設の北側に位置する木棺です。主軸は西北西一東南東軸で、掘り方は長軸3.40m、短軸1.68m、木棺部分は長軸2.24m、短軸1.04mを測る大型のものでした。第1埋葬施設よりはやや低い位置にあり、全体が東側へわずかに傾斜しています。掘り方内にかなりの量の朱付石が散在していましたが、その性格はよくわかりません。ただし、掘り方全体に上層から大きな落込みが認められますので、それらの朱付石はこの陥没に伴うものかもしれません。

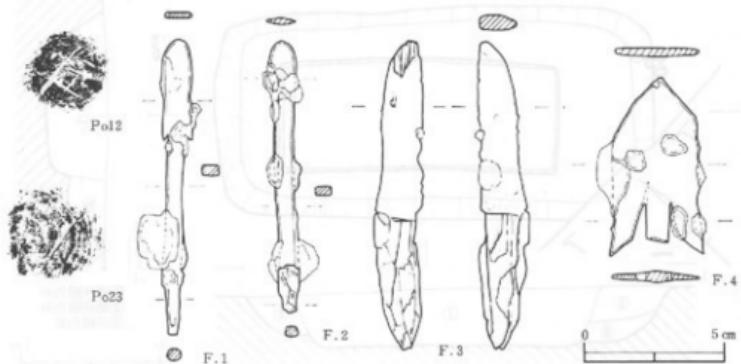
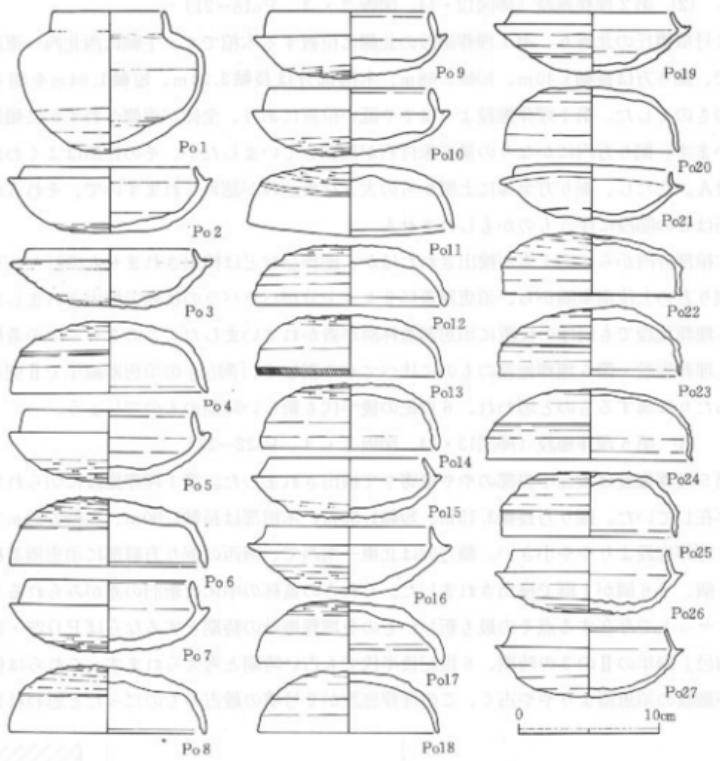
木棺部分内からは鏡1本が検出されたほか、副葬品などは検出されませんでした。しかし掘り方の上位南東隅から、須恵器蓋杯2セット分がバラバラの状態で検出されました。第5埋葬施設でも同様の位置に須恵器蓋杯群が置かれていました。この2セットの蓋杯は、第1埋葬施設・第5埋葬施設のものに比べてやや新しく、「陶邑」の須恵器編年でⅡ型式の4あたりに属するものと思われ、6世紀の後半代も新しい時期のものでしょう。

(3) 第5埋葬施設（挿図13・14、図版2・3、Po22～27）

第5埋葬施設は墳丘中央部のやや東寄りで検出されました。第1埋葬施設に切られた形で存在していました。掘り方長軸3.15m、短軸1.50m、木棺部は長軸2.00m、短軸0.80mで、第2埋葬施設よりやや小さい。軸方向は北東一南西で、南西の掘り方肩部に須恵器蓋杯の蓋5個、身6個が1群で検出されました。これらの蓋杯の中には新旧の差がみられるものの、セットで存在する点その最も新しいものを埋葬施設の時期とするならばP O 25・26が「陶邑」編年のⅡの3の時期、6世紀後半代でも古い時期と考えられます。これらは他の埋葬施設の須恵器よりやや古く、この埋葬施設が2号墳の最古のものだったと思われます。



挿図13 第5埋葬施設遺構図

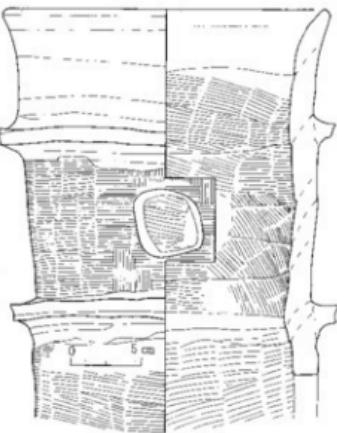


插図14 2号墳出土遺物図

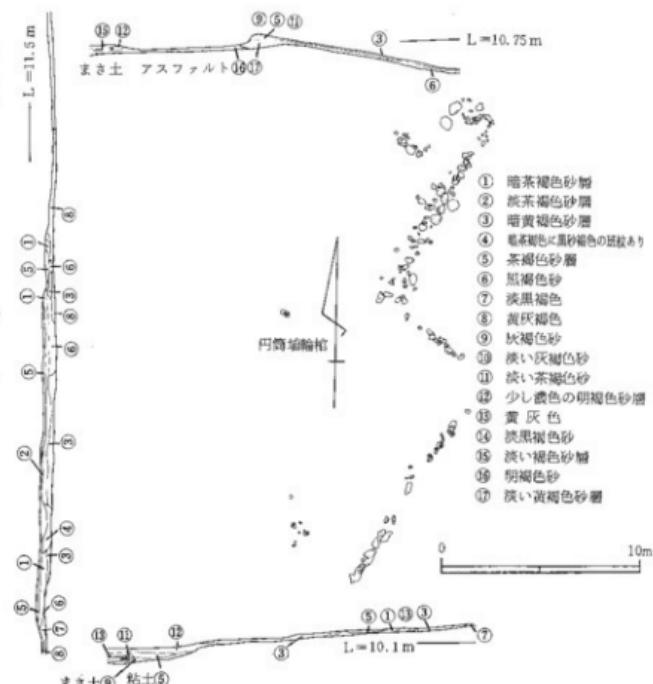
B. 前方後方墳26号墳（挿図15・16、図版3）
 17F・17G・17H地区にまたがり1号墳の北東、
 2号墳の西、弥生時代の土墳墓群の直上に位置しま
 す。大きさは長さ約30m、幅は前方部約8m、後方
 部約17m（いずれも推定）の大きさになります。西
 半部は耕作によって壊され東側の最下段葺石が残る
 だけでした。葺石は、50~60cm前後の石が墳形に
 沿って立てられていました。墳丘内にはかなりの石
 が出土していることから、もう少し上の方まで葺石
 があったものと思われます。

埋葬施設は、円筒埴輪棺と思われるものが1基出
 土しています。主軸は東西です。東側には石が立て
 られていましたが西側は壊されているためはっきり
 しませんでした。

埴輪棺使用の円
 筒埴輪には2段目
 と3段目に1対ず
 つ円形の透し穴が
 みられます。外面
 は縦のハケ目調整
 ののち横のハケ目
 が施されています。
 内面は、粘土ヒモ
 のあとがはっきり
 見られ、上半分にハ
 ケ目調整が施され
 ています。家型埴
 輪の小片も出土し
 ています。古い須
 恵器がみられない
 点ともあわせて、
 古墳時代中期前半
 墳の築造でしょう。



挿図15 円筒埴輪実測図



挿図16 前方後方墳（26号墳）実測図

C. 28号墳（S X28）（挿図17・18、図版3）

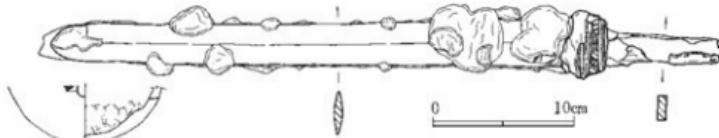
14G 地区の北西区に位置し、径約11m・幅約0.55m・深さ約0.2mの周溝を持つ円墳です。この28号墳は墳丘（盛砂部）を持っておらず1号墳、2号墳などと違って最初から墳丘を造らなかったと考えられます。

中央部の埋葬施設は、南東一北西の主軸を持つ箱式石棺（挿図18）です。墓壙は長軸約3.4m、短軸約2.2mを測り、石棺は長軸約1.8m、短軸約0.55m、側壁上端から床面までの深さ約0.42mを測ります。蓋石は6枚であったと思われますが、土圧で割れおり正確にはわかりません。側壁の北側は中央の石を内側にして3枚、南側は直列に2枚あり、東小口は3枚、西小口は2枚の板石でできており、内面には赤色顔料が塗ってあります。

棺内では人骨、齒、鹿角装の鉄剣、粘土の小片を検出しています。人骨は2体分と思われ、西側では頭頂部の骨と下顎の骨がほぼ完全な形で残っていました。また東側には崩れてはいましたがV字状石枕と思われる石材があり、その上に頭骨と見られる骨、周辺には歯が散在していました。東側に比べて西側の骨のほうが残りが良いようです。

副葬品としては、鉄剣（挿図17）が1本検出されています。これは棺中央部南側にあり剣先を東側に向けて入れられているところから、西側の人物の副葬品と思われます。その鉄剣には鹿角で装飾が施されており、鹿角には直線と曲線を巧みに組み合わせた直弧文（挿図17）が見られます。この直弧文には赤色顔料が残っており、鹿角部には赤色顔料が塗ってあったものと推察できます。このように鹿角に直弧文が施されているものは、鳥取県内では初めての出土です。

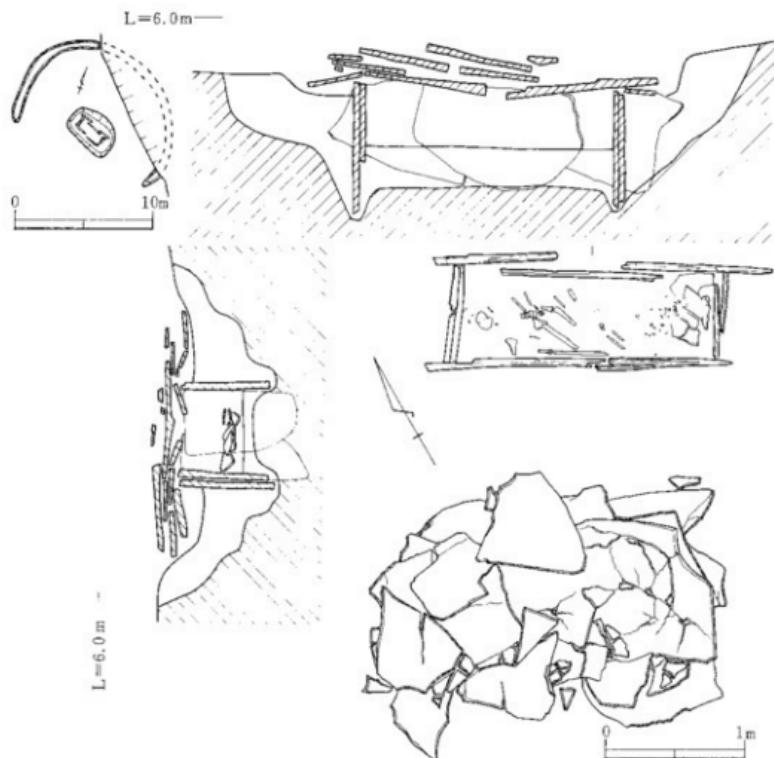
棺外では、蓋石の約20cm上から石棺に伴うものであろうと思われる須恵器の甕の下半分が出土しています（挿図17）。この甕の外面は木口状のものでひっかいた後、ナデ調整仕上げがしてあり、胴部中央あたりには波状文が施されているのがかすかにわかります。内面の底部には指圧痕がはっきり残っており、ここにも灰釉が見られます。内面上部はナデ調整仕上げが見られます。この甕は、「陶邑」編年第Ⅰ期3～5の時期とみられ、5世紀後半のものと考えられます。したがって28号墳も同時期のものと思われます。



挿図17 28号墳遺物図

4. 方形周溝墓（S X29）（挿図19・20、図版4）

16H地区の南西区にあり26号墳の北東に位置しています。プランはコの字状周溝に囲まれた台形状で、周溝部は幅約1m・深さ約0.4m・一辺約6m・周溝総計約18mです。



挿図18 28号墳遺構図

墓域内には7つの土壙がありそのうちSK01・05が29号墓の埋葬施設であったと思われます。SK01は西側周溝部にあり、長軸約2m×短軸約1mを測り、中央部には長軸約1m×短軸約0.5mの垂直に近い落ち込みが見られるところからこのSK01は木棺墓であったと考えてよいと思います。SK05は墓域内中央部にあり数個の土壙が切り合っていてはっきりしませんが、木棺墓もしくは土壙墓と考えられます。S



挿図19 方形周溝墓S X 29遺構図

K01・05共に副葬品と思われるものは検出されませんでした。墓域内には盛砂ではなく、直接地山を掘り込んだものと思われます。

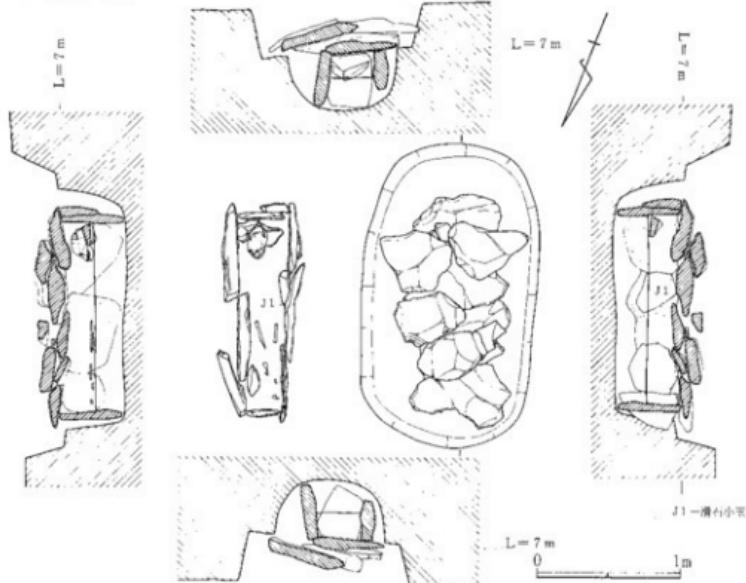
同じく墓域内にあるSK03・05は完形の弥生土器を伴っていましたが、これらは直接29号墓とは関係ないもので26号墳の下より検出された弥生土器群の統きであると思われます。周溝内及びSK01・05から出土している遺物は甕・高杯などの小片で、これらの出土土器からこの29号墓の時期は古墳時代前期と考えられます。



插図20 方形周溝墓S X 29遺物図

5. 石棺墓S X 36(插図21、図版4)

15J地区の中央面より位置し、35号墳の南東、石棺墓S X 37のすぐ北です。主軸を北西—南東にもつ箱式石棺です。墓壙は二段の掘り込みをもち、上段は長軸2.17m×短軸1.22m、下段は長軸1.67m×短軸0.77mを測り、石棺は長軸1.37m×短軸0.32m、深さ0.35m



插図21 石棺墓S X 36遺構図

です。蓋石13枚、側壁は東側が4枚、西側が5枚の板石でできています。小口石は南側が2枚、北側が1枚です。棺内には南東側にV字状の石枕を備えた上にほぼ完全な頭蓋骨が置かれ、北西側では大腿骨と下腿骨が残っていました。また遺骸の左手にあたる部分から滑石製の小玉が1点検出されました。その他には遺物を検出できなかったのですが、崩廻の35号墳等から5世紀前半とみられます。

6. 弥生時代前期の土壙墓群

16Fを中心とした2号墳は黒砂層の低い所に立地しており、2号墳から西と北は黒砂が高くなっています(挿図22参照)。西の方の高くなった尾根と思われる所に前方後方墳がありその下に弥生時代の土壙墓群を検出しました。黒砂の高い所は消滅しており、土壙群の範囲の西限は判りませんでした。これらの土壙の総数は42基、その内木棺墓と思われるもの9基、石棺墓1基、土器棺墓1基、土壙墓31基です。土壙墓の多くは長軸1.5m～2m、短軸0.8m～1mほどの楕円形で、長軸は等高線にほぼ平行しています。また木棺墓は土壙墓より新しい事が切り合い関係でわかりました。土器棺は壺と甌が合わせてあり、内より頭骨の一部と碧玉製の管玉が41個検出されました(概報Ⅱ、pp.39～40参照)。

これらの土壙墓は17Fの黒砂の境界から14J地区の11号墳までの範囲にあり、弥生時代前期の中から新にかけての時期の墓と考えます。

A. 土壙墓16H SKO3(挿図23・24、図版4)

16Hの南西部に位置し、S X29の直下、S I 76の西にあります。主軸は北東—南西軸です。平面形は楕円形で、上部長軸1.68m×短軸0.45m、底面長軸1.03m×短軸0.45mを測ります。骨等はありませんでしたが、形態的には壺と考えられます。遺物は土壙底面近くで有蓋壺、鉢が出土しました。

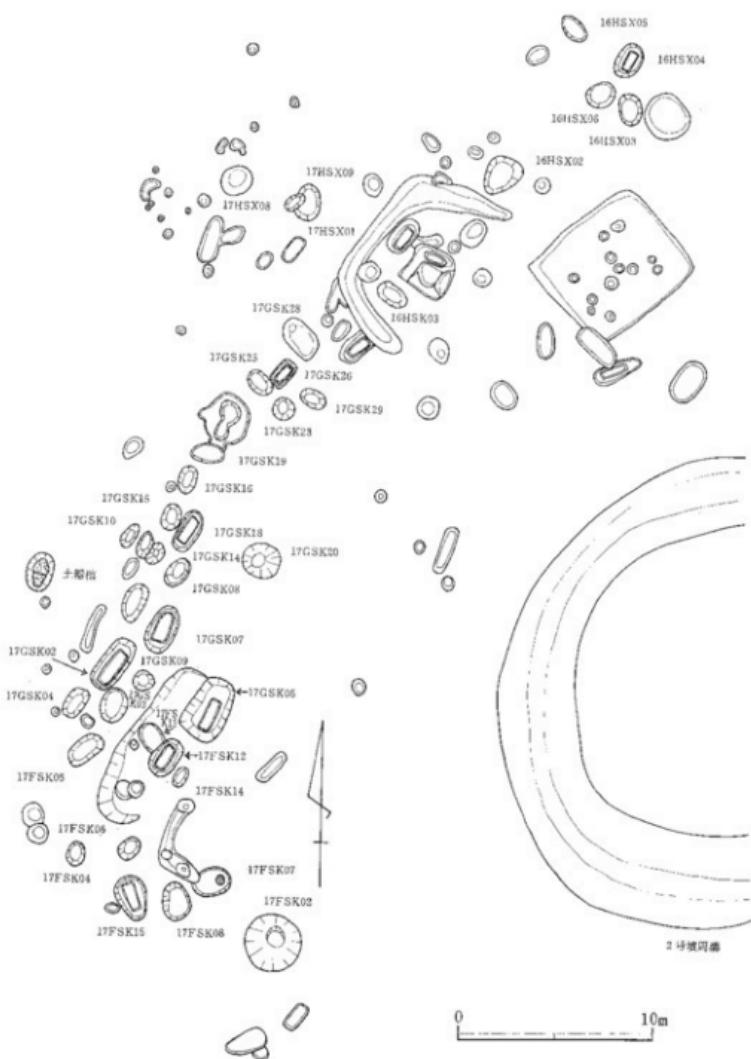
壺(P O 1)は、口縁部がなく胴部のみで、底部は平底につくられ底面が少し窪んでいて、木口状工具でかいた痕が見られます。蓋縫穴2孔が対にあります。外面は全面にヘラ磨きが施されていたと思われますが、剝離が著しく微かに残るだけです。内面はヘラ磨きです。胎土は2～3mmの石を含み荒い。

鉢(P O 2)は口縁部がやや外反し、底部は平底です。外面はヘラ磨きが全面に施されていたと思われますが、胴部中央付近は表面剥離が著しく口縁部及び胴部に微かに残るだけです。内面は口縁内側にヘラ磨き、胴部はナデ仕上げです。胎土は2～3mmの石を含み荒い。

これらの遺物から、SKO3は弥生時代前期と考えられます。

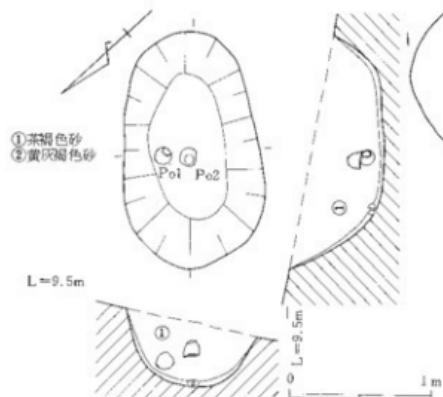
B. 土壙墓17F SK08(挿図25・26、図版5)

17Fの北東区南側にあるSK08で管玉5個が検出されました。弥生時代の遺構に伴う管玉としては、17G地区の合口土器棺から検出された41個に次ぐものです。



插図22 弥生時代前期土壤墓群配置図

この土壤墓は弥生土壤墓群の南側に位置し、西側に木棺墓（S K15）東側に土壤墓（S K07）が並んでいます。主軸は南北で、長軸1.99m×短軸1.43mの橢円形です。前方後方墳の表土を剝いだ検出面では灰褐色を示し、東側の土壤が黒褐色、西側の木棺墓が茶褐色



挿図23 土壌墓SK 03造構図

であることに対比されます。深さは検出面より、土壤底面まで21cmあります。

遺物は、管玉が南側でレベル5.9cmの差で集中して検出された他は何も検出されませんでした。この管玉は径2.2mm、長さ9.9mm、内孔径1.0mm(平均値を示す)で極めて細く長い。材質は碧玉で、玉中央付近で貫通した仕切りの跡が見えることより両面から穿孔したことかわかります。また内壁は、針状の器具を回転して穿孔したことを想像させるらせん模様

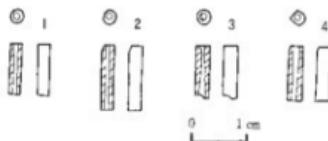
が観察出来ます。時期は付近の土器から弥生時代前期と推定されます。

C. 木棺墓17F SK 15 (挿図28、図版5)

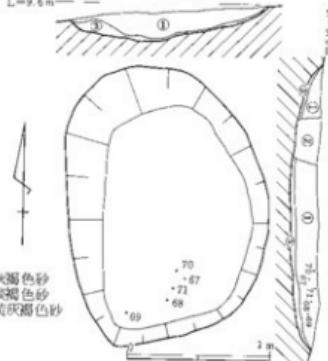
17F SK 15は土壌墓群の南にあり木棺墓としては一番南にあります。主軸は北北東—南南西で2段の掘り方を持ち、一段目は変形の小判形で長軸2.4m×短軸1.6m、2段目は棺の部分と考えられ長軸1.5m×短軸0.65mを計ります。棺内には副葬品はなく、遺物も弥生土器の破片が少量みられましたが岡化できませんでした。棺部分は板を埋めた跡などは確認できず、長方形状に暗灰褐色砂と灰褐色砂が埋砂として検出されました。小口は北側の方がわずかに広く、頭を北に埋葬したと考えられます。

この遺構に伴う遺物はほとんどありませんが、他の木棺墓が土壤を切っていることからこの木棺墓も多くの土壤に比べて新しく、弥生時代前期の末と考えます。

挿図24 SK 03遺物図



挿図25 SK 08遺物図



挿図26 土壌墓SK 08造構図

D. 木棺墓17G S K02 (挿図28、図版5)

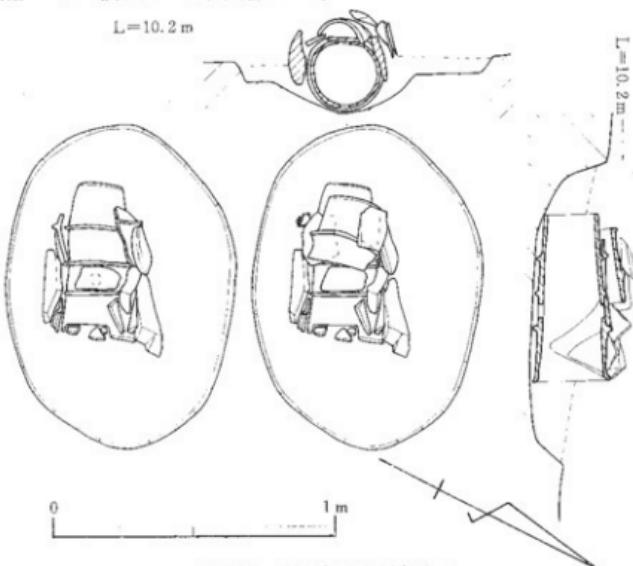
17G S K02は木棺墓で、掘り方は変形の矩形をしており長軸3.0m×短軸1.4m、棺部分は東側に寄っており長軸2.1m×短軸0.65mです。主軸は北東—南西で小口は北・南ともほぼ同じ長さです。位置は土壙墓群の南の方にあり、既に概報Ⅱで紹介した17G地区の合口土器棺墓の南西にあたります。この木棺墓に明確に伴うと考えられる遺物はなくその点からは時期は判断できませんが、土師器を伴うピットがこれを切っており、周囲が弥生時代の土壙である事、またこの遺構内からも弥生土器と思われる土器の小片が検出されている事などから、これは弥生時代前期の木棺墓だと考えます。

E. 木棺墓17F S K12 (挿図28、図版5)

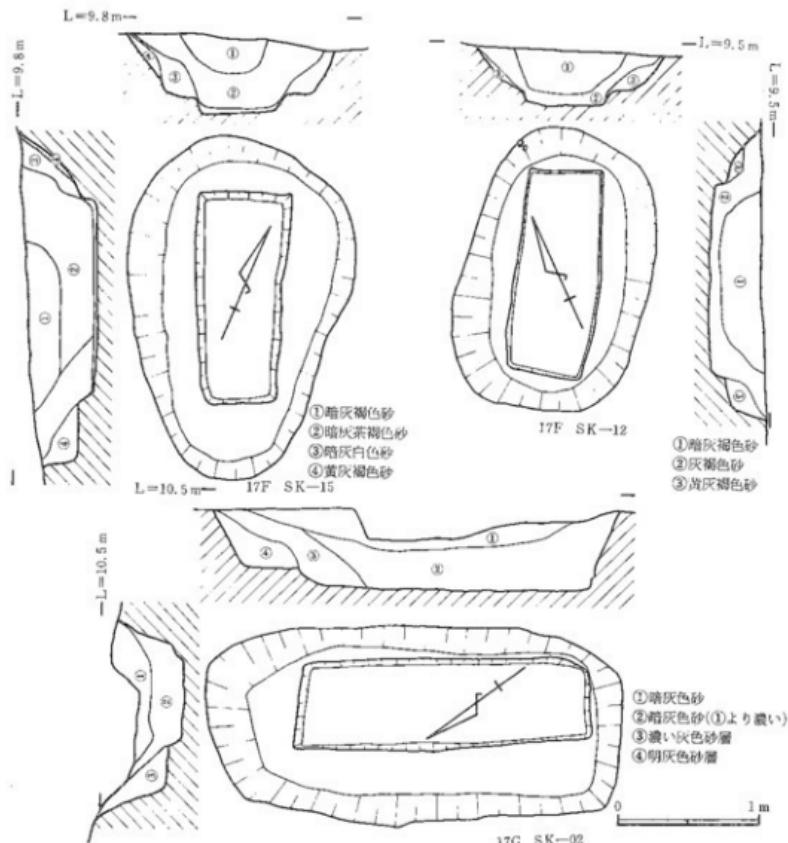
17F S K12は17G S K02の南東5mにあり17F S K15の北7mにあります。土壙墓群の中では南の方に位置します。17F S K12と同S K13、17GS K05は白砂をカットして作られた平坦な所に掘り込まれています。この木棺墓は土壙墓S K13を切っており、その後にピットによって切られています。掘り方は隅の丸い矩形で長軸2m×短軸1.3m、棺部分は矩形で長軸1.4m×短軸0.6mを測ります。掘り方の北側上面で甕の破片など2点を検出しました。棺部分は他の木棺墓に比べてはっきりしており灰褐色砂が棺部分に明瞭に確認できました。時期は出土した遺物から弥生時代前期と考えます。

7. 円筒埴輪棺S X 31 (挿図27・35、図版5・6)

この円筒
埴輪棺は西
側のやや小
高い丘の東
斜面際に位
置します。
長軸方向は
N23°Eで单
棺、これが
付属するよ
うな占墳等
は確認でき
ませんでした。
小口の
覆いはあり
ませんが、



挿図27 塩輪棺S X 31遺構図



插図28 木棺墓SK02・12・15造構図

側面の北側に3枚、南側1枚の板石を並べています。上面にある透し孔には板石、側面にあたる相対する2個の透し孔には各々円筒埴輪片で蓋をしています。さらに側面の透し孔の片方を板石で覆い、全体を円筒埴輪片で覆ったうえで反対側の透し孔の上にあたる部分に板石をかぶせています。土壙全長115×85cm。使用されている円筒埴輪は全長57.8cm、口径25.8cm、底径18.4cmで他の埴輪棺使用のものと比べて3cm程高く色も灰褐色で白っぽい。焼成良好。外面は1次調整縦ハケ、第3段に2次調整として横ハケ、その後部分的に縦ハケが見られます。口縁部横ナデ。内面は部分的に横ハケ、第4段にあたるところに指圧痕が全面にめぐっています。底面の粘土はりつけによる補強は他の全ての円筒埴輪にも同様に認められるようです。時期の決め手になる土器がないが、立地等から中期中葉頃か?。

第4章 研究ノート

1. 16K地区埴輪群について（挿図29、写真5～16、巻頭カラー） 清水真一

16K地区出土の埴輪群は、16K地区北西・北東及び17K地区北東部をわずかに含めて出土した。地形的には遺跡の北西端に位置し、埴輪群のすぐ西側は農業用水である今津川旧河道によって切られており、さらにその西側は1～2m低くなっていた。

埴輪群は12月上旬に初めて姿をみせ、全体があらわれたのは1月初め、実測とり上げが2月中旬までかかり、一部復元でき展示したのが2月20日だった。その間、38年豪雪につぐ2度の寒波にみまわれ悲戦苦闘の連続であり、十分に埴輪の存在の意義を考える時間のないまま現在に至ってしまった。

調査して取り上げた埴輪の数は、まだ正確ではないが復元個体数・図面等から次のようにになる。円筒埴輪12個、朝顔型埴輪53個、蓋型埴輪9個、家型埴輪5個、盾型埴輪3個、甲冑型埴輪3個、柄型埴輪1個、大刀型埴輪（？）1個などである。埴輪のおかれた状況は完形に近い朝顔型埴輪がてんてこ入れの方向にむいているし、一辺7～8mの方形部分のほとんどにびっしりとつまっていたため、当初は埴輪の捨て場か？と想像した。しかしながら取り上げていくうちに樹立したままの円筒埴輪の基部もあり、朝顔型埴輪も樹立したものか横転したと考えられ、ここに立て並べてお祭りを行ったものと考えるに至った。

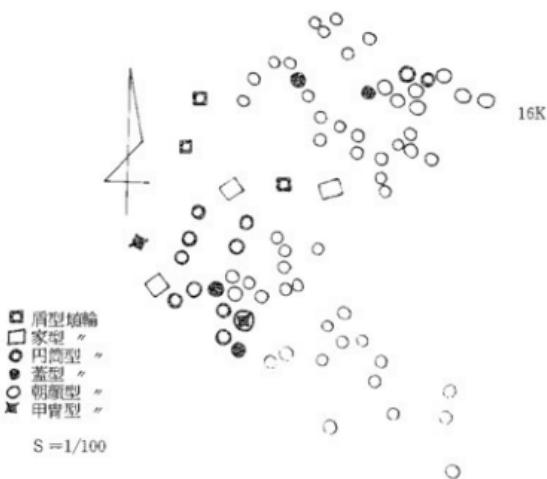
埴輪群の平面的な配置は挿図29にみる通りであるが、一辺約8mのL字状をしているよう見える。西に中心をおき南北に45°の角度で翼状に広がる。北翼は幅4mで広く、南翼は幅2mでやや狭い。根元が残っている大半は朝顔型埴輪であり、円筒埴輪は西端中央部に集中して残っている。その個体数は12本であり、円筒埴輪の使用の方法が問題となる。それは通常の古墳での埴輪列の種類は圧倒的に円筒埴輪が多く、朝顔型埴輪との比較は5：1～10：1の割合になる。これが前方後円墳の墳頂部分の方形区画ではその比率が逆転する場合がある。また最近調査された西伯郡名和町糸迦堂古墳の周溝から出土した埴輪はすべて朝顔型埴輪であった。高浜遺跡でも53本の朝顔型埴輪に対して、円筒埴輪は12本でその割合が逆転する。16K地区的円筒埴輪の中には、1本であるが甲冑型埴輪の基部が入っていた。つまり不安定な甲冑型埴輪を安定させるための土台となるものである。今ここに12本の埴輪がすべて土台とすると、基部の不安定な蓋型埴輪9本、甲冑型埴輪3本がうまくその上にのる勘定となる。円筒埴輪が集中した中央部西地域に甲冑・蓋型埴輪が集中することもこの考えを肯定する材料となるだろう。ゆえに高浜の埴輪群の中から円筒埴輪列を除くと、朝顔型埴輪と形象埴輪群となり、古墳墳頂部の埴輪群のあり方に等しくなる。つまり古墳墳頂部で行われた祭祀と同様の祭りが行われたものだろう。家型埴輪は5個体で、四注造りのものが西側中央部端に位置し、東側には入母屋式が1棟おか

れていた。この他に切妻式のものが1棟、小型の四注造りのものが1棟の他、松江市平所埴輪窯出土の屋根に火炎状の飾りをのせたものに近い大型の家型埴輪片が1棟分あるが、破片はそう多くない。火焰状飾りをのせるものの1棟、竪魚木をのせるもの2棟がある。盾型埴輪は北翼の中央部に3個体位置していた。

3個体とも非常に残り

が良い。蓋型埴輪はすべてバラバラになっていたが、飾り羽根が36枚あり9個体分と判明した。1個体分であるが鞘型埴輪があった。バラバラのものを集めたものである。

埴輪はもともと古墳・墳丘に立て並べるものであり、その意味では16K地区のように古墳以外の場に立て並べることはまれに近い。埴輪は本来仮りの器であり、葬送儀礼にともなう重要な器物である。この器物を古墳以外の場に立て並べたことは、古墳墳丘上でとり行なわれる祭祀と同様の祭祀は16K地区で行ったということを意味するだろう。それでは一体どんな祭りが行なわれたのであろうか。高浜遺跡を総括的にみると古墳時代前期後半（4世紀後半）～中期前半（5世紀前半）にかけて、120棟もの竪穴住居と25棟もの掘立柱建物の立っていた大集落だった。その後古墳時代中期中葉（5世紀中葉）～後期後半（6世紀後半）にかけて、前方後方墳1基を含めて古墳21基、小石棺墓・木棺墓・円筒埴輪棺墓12基の墳墓群が作られる。埴輪群はこの集落が移動し墳墓が築造される間、つまり古墳時代中期前半の終り頃に作られたとみられる。集落を移動し、後地を墳墓に使用した集団の共同祭祀の場と考えられることもできるだろう。奈良県磯城郡三宅町石見で発見された石見埴輪出土地（石見遺跡）では、出土地点が川の中洲に位置するため水神祭に埴輪群を使用したかと考えられている。16K地区の埴輪群も埴輪を検出した下層から、集落の時期の井戸状遺構がみつかった。井戸があった場所を覚えていた人々がその上で水神祭を行った可能性もまったくないわけではない。が、現在のところ死者をとむらうための儀式、もしくはそれに付随する儀式の場と考える方が妥当かと思われる。



插図29 16K 墓群配置模式図

（参考文献：『奈良県磯城郡三宅町石見の古墳』）

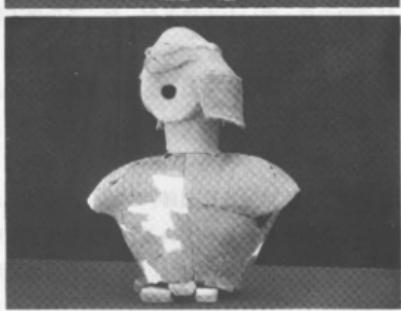


写真 5～8 上：埴輪群全体写真、下左：甲冑型埴輪1、右：甲冑型埴輪2

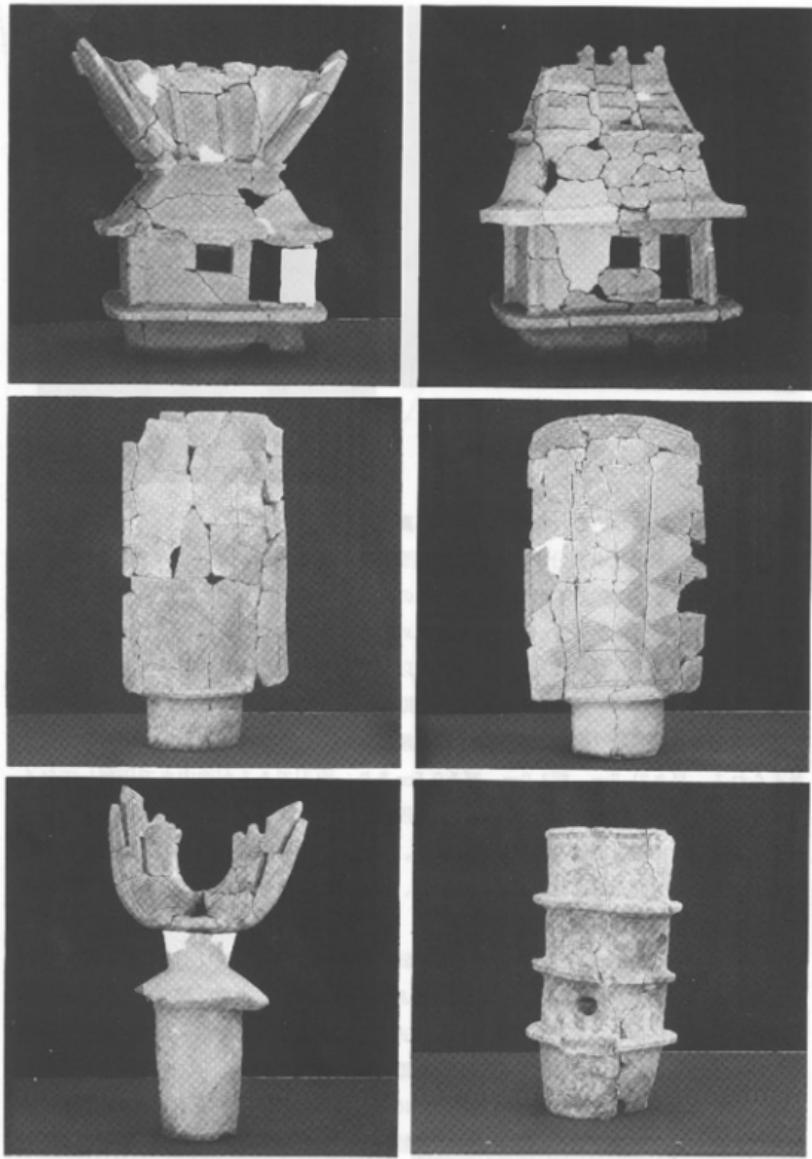


写真9～14 左上から入母屋式家型埴輪1、盾型埴輪1、蓋型埴輪、右上から四注式家型埴輪2、盾型埴輪2、円筒埴輪

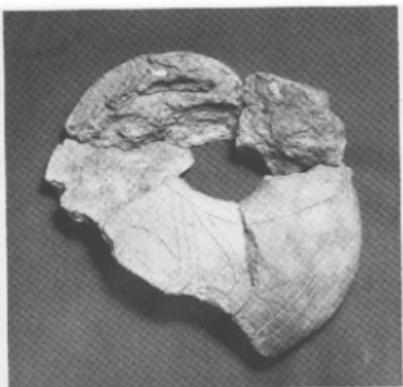


写真15・16

左：柄型埴輪 右：朝顔型埴輪

2. 鉄劍型銅劍について（挿図30・31、写真17）

清水真一

14F地区北西区の北東部分で出土した鉄劍型銅劍は、考古学ジャーナル181号で紹介したが、事実認証や実測図の不備があった。その後、加美遺跡について京嶋 覚氏から、山崎5号墳については報告書が手に入ったため、ここに改めて資料紹介しておきたい。

鉄劍型銅劍を出土したのは5遺跡、計21本以上である。それぞれの遺跡をあげてみたい。

1. 長瀬高浜遺跡：黒砂内の出土で、時期を決める共伴遺物を欠くが、黒砂包含層の土器が出土する銅製品（銅鏡、素文鏡、珠文鏡等）から、古墳時代前期末～中期初頭頃と考えられる。長さ21.7cm、幅3.0cm、厚み0.5cmあり、両刃であるが途中まで研磨してなく刃状をしていない。茎部に特徴がみられ、二段に細くなる。目釘穴とみられるものが2個上下にあるが、下の1個は途中で折れている。また上の1個の左右にも半分の孔がある。上の1個が一方方向からあけられるのに対し、他の3個はすべて両側からあけられている。

2. 猫塚古墳 香川県高松市石清尾山^{注1} 竪穴式石室内から17本以上出土している。全長はやや短いものの16～22cmで、ほとんど同じ形態で茎部も単純な形をしている。目釘穴も無いかあっても1孔である。厚みが0.7cmありややぶ厚い。古墳は積石塚の前方後方中円墳という非常に珍しい形をしており、竪穴式石室の副葬品として出土している点、遺物の価値が推察できる。古墳時代前期後半の時期と考えられている。

3. 吉岡神社古墳^{注1} 香川県丸龜市山田にある吉岡神社裏の円墳から出土したと、猫塚古墳の報告書に掲載されているものの、実物はなく実態は不明であるが、猫塚古墳と同じ時期の可能性がある。

4. 山崎5号墳^{注2} 和歌山県海南市山崎にあり、全長45mの前方後円墳の後円部・豊穴式石室直上から出土している。石室内副葬品として鉄剣が1本出土しており、須恵器杯が1個あり、須恵器の時期から5世紀初頭の時期を考えておられる。全長23.7cm、身部19.7cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmである。茎部は中央部に0.5cmの径の目釘穴を1個もつ。身柄部に認められる縞に沿って設けられた2本の溝は、身部中央で幅0.6cm、深さ0.2cmを測りシャープな仕上りをしている。

5. 加美遺跡^{注3} 大阪市平野区加美東にあり、弥生時代末～古墳時代初頭の豊穴住居群をとりまく溝状構内から出土している。調査者は庄内期（古墳時代初頭期）と考えられている。茎部は1孔の目釘穴をもつが、カマチ部分には左右対象に1孔ずつあけられている。ともに両側からあけられている。全長17.2cm、幅3.0cm、厚み0.6cmを測る。

これらの鉄剣は、すべて鉄剣型とはいえないが、弥生時代の銅剣がしだいに広形銅剣化したに対して、その系譜には結びつかない新しい型の鉄剣として把握できる。
機能的には鋭利であり実用的にみえるが、長瀬高浜例でみられるように剣としての機能ははたさなかったとみられる。加美例・長瀬高浜例でみられるように、目釘穴以外に孔をあけていることは、それを意味するものであろう。

また少数しか出土していないため分布等について決定的なことは言えないが、西日本の瀬戸内沿岸地方にその中心があり、山陰にもみられることは九州や畿内北部地方からも出土する可能性を十分にもつ。

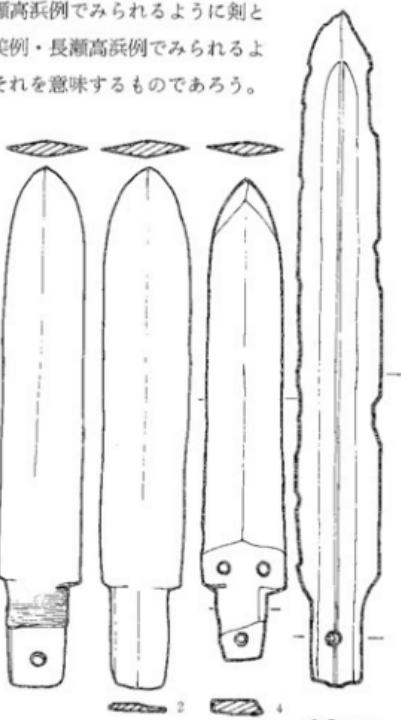
西日本各地の前～中期大型古墳から出土する副葬品としての数々の遺物が、ここ長瀬高浜遺跡では生活面として出土する点に、非常に大きな意味をもつものと考えたい。

注1 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』1933

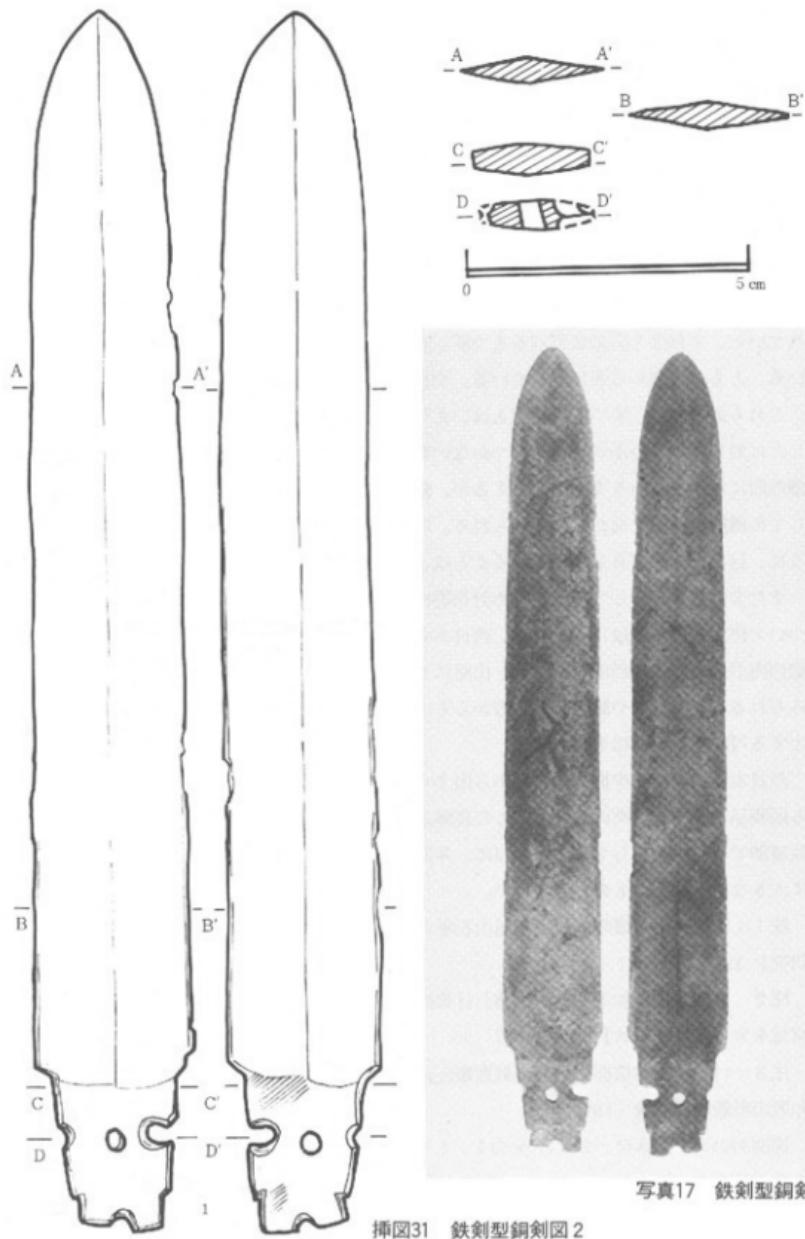
注2 武田陽子「加美遺跡の性格」（『難波宮址を守る会ニュース』No.40）1977

注3 『山崎山古墳群緊急発掘調査報告』和歌山県教育委員会 1978

挿図30のスケールは、2は1.7分の1、4・5は2分の1。



挿図30 鉄剣型銅剣図1



挿図31 鉄劍型銅劍2

写真17 鉄劍型銅劍

3. 帯金具（挿図32・33、図版5）

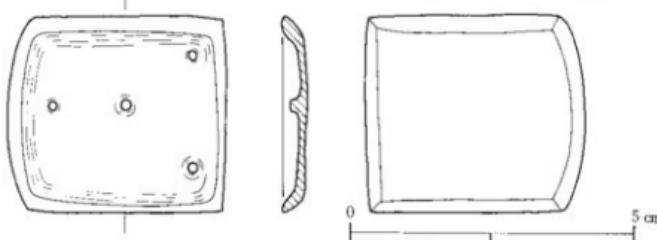
国田修二郎

長瀬高浜遺跡の出土品としては珍しく、奈良時代の帶金具が出土しました。鈎帯の帯金具で鉈尾とよばれるいちはん端の部分です。14K南西区、11号墳の周溝の上で出土しており、大きさ3.9cm、幅3.5cm、厚さ0.4cmの銅製で、色は銅錫色です。

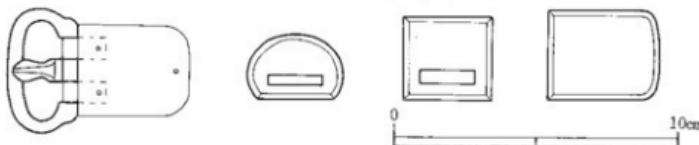
鈎帯とは、鈎とよばれる帯金具を革帯に取りつけた腰帯で、文献によれば奈良時代には銅金具を取りつけた銅鈎帯が、平安時代には銅金具を石に変えて石鈎帯が官人の腰帯として採用されていました。この鈎帯の帶金具は、位階五位以上の者は銅金具を金銀メッキした鈎帯を締め、位階・官位により帯の幅・帶金具の大小の違いがあり、又製作・管理には官の統制があったようです。鈎帯一帯分の帶金具は、各地の出土品によると留め金の鉄具と端の鉈尾の間に丸柄1・巡方2・丸柄6・巡方2・丸柄1の順序で配列されると想定されていますが、数・配列の違う出土品もあるようです。これらの帶金具は、同形の裏金具を帯裏で鉢留されています。又巡方・丸柄の下方の長方形の孔は本来飾を垂れ下げるためのものです。

当遺跡出土の帶金具は鉈尾一個体ですが、これから他の帯金具の大きさを推測すれば、帯の幅3.5cm、丸柄の長さ3.5cm、巡方の長さ3.5cm、幅3.1cmの大きさが推定されます。この大きさより長瀬高浜出土の鈎帯の使用者は位階七位の者と推定され、長瀬高浜の近くで奈良時代にこの位階を持っていた者を考えると、倉吉の伯耆國守の役人の内、七位の位をもつ「掾」が相当し、この國守役人が長瀬高浜にやって来て落したものとも考えられます。

鳥取県下での帶金具の出土例は、伯耆國守・青木遺跡で銅製の鉄具1、因幡國守で丸柄1・巡方1、伯耆國守で丸柄1、東郷町宮内で巡方1の石鈎が出土しています。



挿図32 帯金具実測図



挿図33 帯金具使用想定図

4. 円筒埴輪棺について（挿図34・35、表1・2、図版6・7）

福島慶純

長瀬高浜遺跡で出土した円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設（いわゆる円筒埴輪棺）は確実なもので11例にのぼる。これらは皆朝顔型円筒埴輪と区別する意味での普通円筒埴輪^{〔注1〕}を用いている。これは古墳にたてられるべき円筒埴輪を棺に転用しているもので、その点で他の土器を棺に転用した土器棺と同一に考えられよう。さらにこれに類似した外見をもつが明らかに棺としての目的をもって作られた円筒形のものがあり、この二者を区別して各々埴輪棺、円筒棺とする考え方がある。ここではそれに従ってこれを埴輪棺とし、なかでも円筒埴輪を用いているから円筒埴輪棺と呼び、円筒埴輪を埴輪円筒と呼ぶことに由来するとはしても埴輪円筒棺という名称を円筒棺との混同を避けるために用いないことにする^{〔注2〕}。

1. 埋輪棺の出土状況

埴輪棺は1例を除いてみな古墳の周溝底面もしくは内・外肩部に上塙を掘り込んで作られている。さらに他の地域においても埴輪棺自体が独立もしくは中心の埋葬施設となっている例は殆んどない。中心的位置から次第に外部へ移動するのではないかとか、古墳築造に関与した土師氏との関連も指摘されるが^{〔注3〕}時間的・位置的変化は現段階では不明である。

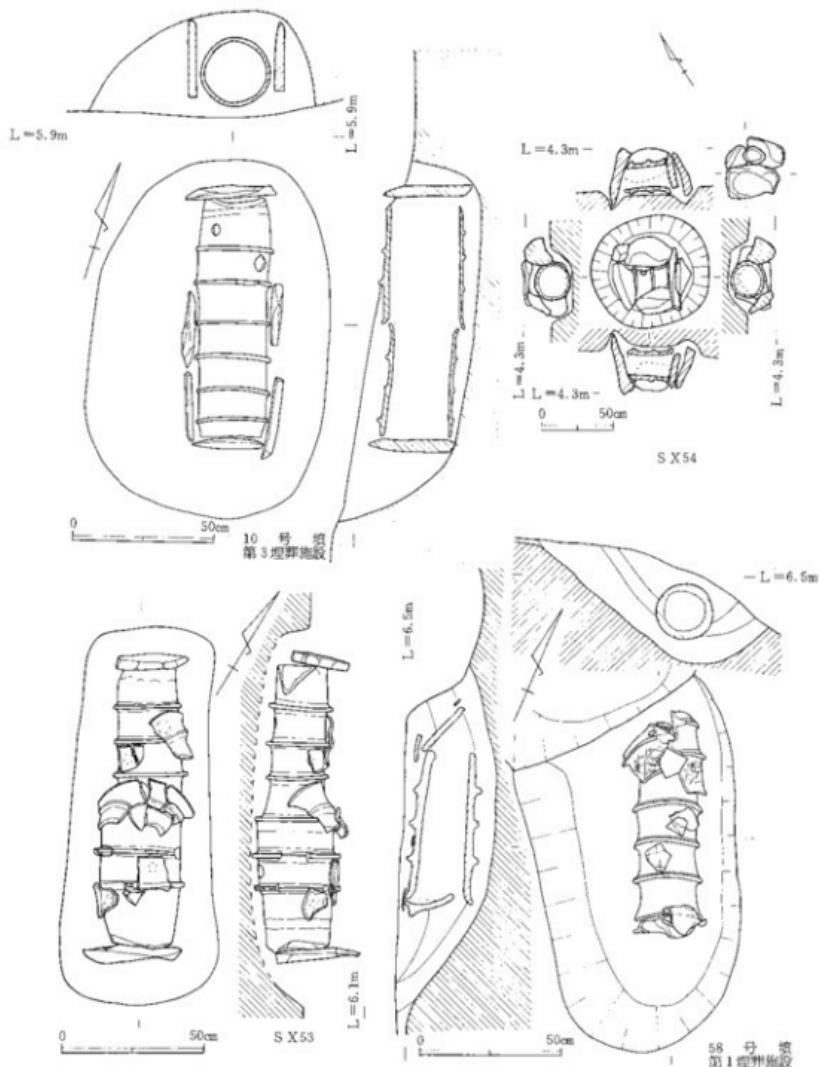
2. 埋輪棺の諸形態

埴輪棺には1本の埴輪を用いたもの・2本の埴輪の口縁部を合わせて並べたもの・2本以上を同方向に並べたもの他があり、各々単棺・合口式棺・挿入式棺等と呼びうる。高浜では単棺4・合口棺7例が確認されている。埴輪を棺として用いる場合、透孔に覆いをするものと考えられる。この孔蓋には通例他の埴輪片・土師器片・板石が用いられ、各々3・1・1の用例がある。さらに両端（小口）を覆って蓋をする。この小口蓋の用材も前者とほぼ同様だが、埴輪片2・板石5がみられる。これらの蓋の存在が確認されなかった例では板片が用いられたと思われる。（表1参照）

埴輪棺を埋納する土壤は、ほとんど灰白色砂の地山を掘り込んで作られており検出は困難である。しかし他の地域の例でみられるような粘土床、疊床といったものは確認されなかった。棺の全長は単棺で60cm弱、合口棺で120cm弱となるがそれ以上の例はない。いずれの場合でも成人の直接埋葬は不可能だろう。以下代表的な例をあげていきたい（表2参照）。

A. S X53

これは1号墳周溝北側外肩で検出された。他にS X54・55・57も同様である。これらが1号墳に対して同心円状に巡っている点は興味をひくし、他の古墳に伴う例も同心円の軸方向をもっている。しかし10号墳に伴う2例に古墳中心に対して求心的方向に軸をもって



插図34 墓輪棺遺構図

いる例がある。^(注4) この53と55・57・10号墳第3埋葬施設・30号墳第2埋葬施設は、合口式棺で両方の小口に板石をたてて蓋をしている点で、その他の細かい点では多少異なるものの長瀬高浜における埴輪棺の典型的形態と言えよう。当地を訪れられて作業員の小母さん方に、「埴輪棺ってどんなの?」とお尋ねになればこのイメージが示されよう。

S X53では透孔蓋に朝顔型円筒埴輪の口縁部が用いられている。棺使用の埴輪は全長55cm、口径28cm、底径20cmのものと現存長50cm、口径28.5cmの円筒埴輪である(挿図34・35参照)。1次調整として継ハケ、タガをとりつけた後の2次調整として横ハケを施す。口縁部は約5cmに及んで内外面ともに横ナデがみられる他、底面内面に粘土の貼り付けが著しい。また内面に横ハケが顕著である。タガのはげた器壁に位置をわりつけた跡と思われる凹線が残っている例がある。黒斑はみられない。この53タイプの埴輪棺は本例のようにやや細めの円筒埴輪(2)と太めの円筒埴輪(1)とが組み合わせてある。この点について今後も検討していきたい。

B. S X54

本例も1号墳周溝西側外肩に位置する。周囲を板石多数で囲む他、板石・河原石をつみ重ねた石蓋をもつ。このような石開いをもつ例は本例1つのみだが、円筒埴輪を棺と考えるのだから、周開の石開いは石室(もしくは石槨)とすべきだろう。棺使用の円筒埴輪は第2段以下を全く欠くが、口径25cmと前例と比べてやや小型である。調整等ほぼ同じ。

C. 10号墳第3埋葬施設

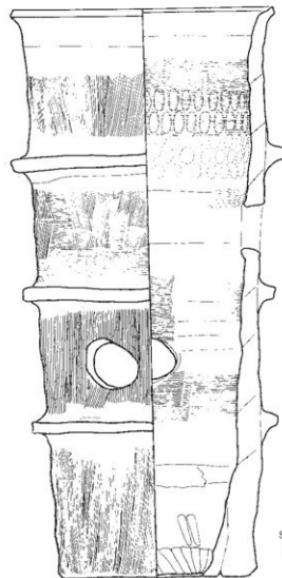
本例は10号墳周溝南外肩より検出された。同じく第2埋葬施設も円筒埴輪棺である。この例はS X53タイプとほとんどかわらないが、棺の両側に側壁状に2枚ずつの板石をたてて並べている点が異なっている。この側壁状の板石の意味については、単に棺の固定のためなのか(?)それともそれ以上、あるいは箱式石棺的な石室を構えるとかの意図を示したものかは不明である。他地域の例をみても、特にこの点に注意されてはいないようで、検討は今後の課題である。

D. 58号墳第1埋葬施設

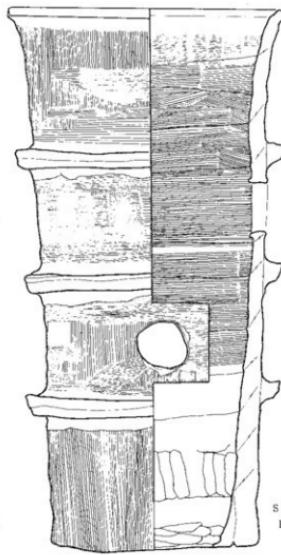
本例は当遺跡で唯一土師器片で透孔蓋としたものである。土師器片は甕・高杯・こしきである。小口には線刻文様を口縁部にもつ円筒埴輪を用いて蓋をしている。

3. 墓輪棺使用の埴輪について

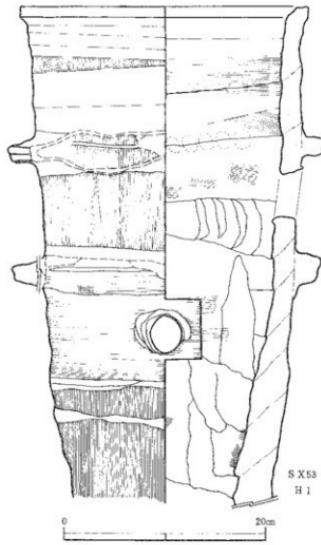
当遺跡で使用されている円筒埴輪は、全てタガ3条で透孔は円形に限られる。全長は約55cmで口径28cm前後、底径20cm前後である。円筒埴輪は数cmの粘土紐を輪づみもしくは巻きあげた上^(注6)で、1次調整として継ハケで器壁を整える。タガをとりつけた後、2次調整として横ハケを施す。これはハケ本体を器壁から離さずに全体をめぐる川西氏の言われるB種横ハケである。^(注7)しかし10号墳の2つの埴輪棺の計4本の円筒埴輪はハケ目が荒く



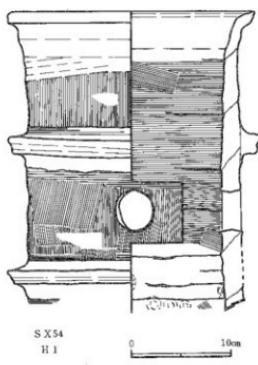
SX31
H.1



SX53
H.2



SX53
H.1



SX54
H.1

插図35 円 簡 墙 輪

他の古墳出土例のものより新しいものと考えられる。さらに25号墳のものは全長推定45cm弱、口径20cm強で1次調整の荒い縦ハケのみであり、より新しいと思われる。他の破片としては黒斑をもつ埴輪も検出されているが、棺使用のものにはみられない。

これらの点で、当遺跡の円筒埴輪は川西編年による第Ⅳ期（5C中～後葉）に位置すると考える。既に川西氏は山陰地方のⅡ期の例として馬ノ山、六部山両古墳出土例、Ⅲ期として北山古墳例を挙げ、さらにⅤ期として高畠7号墳他を例示しておられるがⅥ期の例は挙げておられない。Ⅲ期は黒斑をもつがⅣ期になると窓が用いられるためそれがなくなる。当遺跡例は黒斑がない点及び形態的に高畠例等より古い要素をもつという点からⅣ期に入ろうが、その内でもより細かい時期差を指摘しうるのではないかと考える。^(注8)

特徴的要素として器壁が1.5cm前後と厚い点・タガの突出度が1.8cm前後と高い点・底部内面のはりつけによる補強・口縁部内外面の幅広の横ナデ等をあげておく。

4.まとめ

当遺跡の円筒埴輪棺の形態的特徴は板石を用いた例が極めて多いという点である。この点は県内の他の例でも共通している要素もあるが(表2参照)、当遺跡では箱式石棺の出土例も多く、砂丘地にかかわらず石材は比較的供給されやすかったのかもしれない。

さらにあらたに検出された埴輪群の内では朝顔型円筒50本以上、普通円筒10本以上が出上した。これらと埴輪棺使用例とは、ほとんど形態的相違はないと思われる。両者の関連、さらにこれらの埴輪の製作地等の問題も今後の課題である。

注1 川西宏幸『円筒埴輪総論』考古学雑誌64-2、pp. 95-164 特に注15参照

注2 橋本博文『円筒棺と埴輪棺』古代探査、pp. 279-316、早稲田大学出版部、1979

注3 墓輪棺で中心的位置にあるものは全くなく円筒棺に限られる。橋本同書参照、以下特にことわらない

注4 当遺跡概報Ⅲ、1979、p. 14f参照

注5 橋本前掲書他参照

注6-8 川西前掲書、p. 126f.、p. 97f.では巻きあげ。当遺跡例では両者があると思われる。内面調整の後も比較的つみあげ跡がはっきり残っているがさらに接合部に粘土を貼りついているため不明な例が多い。

cf. 「ハンボ塚発掘調査報告書」名和町教育委員会 p. 20f. 他 1980

『鳥取県史蹟勝地調査報告』第2冊 鳥取県 p. 121-4 1924

『馬ノ山古墳群』佐々木古代文化研究室 1962

表1 長瀬高浜遺跡の埴輪棺の形態

(数字に○印は大別回数)

	①	②	3	4	5	⑥	7	⑧	9	⑩	11	計
透孔蓋	○	/	/	/	/	○	/	○	○	/	?	4
朝顔型	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
普通円筒	○	/	/	/	/	○	/	/	○	/	/	3
土師器片	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	1
板石	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	1
小口板石	○	○	○	○	○	/	/	/	/	○	○	7
(A) 1:1	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	2
(B) 1:2	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	2
(C) 1:4	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	1
石室状	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1
側石あり	/	○	/	/	/	○	/	/	/	○	○	4
小口埴輪片	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	2
単	/	○	/	/	/	○	○	○	/	/	/	4
合 口	○	/	○	○	○	/	/	/	○	○	○	7

表2 鳥取県内の埴輪棺・円筒棺出土例

No.	名 称	出 土 地	形態	小口の蓋	透孔の蓋	遺骨他	備 考
1	S X 53	1号墳周溝	合口 板石	板石	埴輪片	幼児骨	1号墳は径33.3mの円墳
2	タ 54	外周部	単	○	なし	なし	
3	タ 55		合口 板石	タ	タ		
4	タ 57		タ	タ	タ	タ	
5	30号墳(2)	周溝底面	タ	タ	タ	歯片	30号墳は径10mの円墳
6	S X 31	独立?	単	なし	板石 墓輪片	なし	
7	35号墳(2)	周溝底面	タ	埴輪片	なし	タ	
8	58号墳(1)	周溝外周	タ	タ	土師器片	タ	35号墳は径10mの円墳
9	10号墳(2)	タ	合口 板石	板石	埴輪片	タ	58号墳は径28mの円墳
10	タ (3)	タ	タ	埴輪片	?	タ	10号墳は径15mの円墳
11	25号墳(3)	タ	タ	板石	埴輪片	タ	25号墳は径13mの円墳
12	26号墳	前方後方墳丘内	単?	?	?	?	26号墳は30mの前方後方墳
A	六郎山3号墳	前方後円墳墳丘内	合口 板石	板石	埴輪片	なし	鳥取市、朝顔型円筒埴輪使用
B	馬山4号墳(3)	前方後円墳後方部	単	タ	—	タ	内行花文鏡副葬、円筒棺
C	タ (7)	墳丘上	タ	タ	板石	タ	東伯郡羽合町
D	タ (8)		タ	タ	埴輪片	タ	
E	タ ?		タ	?	?	タ	円筒棺
F	ハンボ塚古墳	円墳周溝外周部	タ	埴輪片	埴輪片	タ	西伯郡名和町、径18m

第5章 まとめ

長瀬高浜遺跡の発掘調査は4年を経過し、水田面と考えられるグライ土壌の検出等、当遺跡の生産・祭祀・墳墓・集落遺跡としての多様性を増々実感させる遺物・遺構が確認された。まさに古代の村落が眼前にあらわれたといつてもいいすぎではないだろう。砂地の環境は土器他の遺存に良好とみえ多くの好資料を残している。住居跡には多量の土器を伴う例と殆んどない例があるが、この違いも個々の例の時期的・形態的差を考えねば理解できない。古墳については前方後方墳の他、殆んど墳丘をもたない円墳が8基確認されており、墳丘を持つものと持たぬものの差も考えねばならない。さらに前方後方墳下で見つかった弥生時代前期の土壙墓群、その北に連なる古墳時代前期の方形溝溝墓の存在は、高浜遺跡の時代的多様性を意味している。また最近発見された大量の埴輪群は、古墳墳丘以外での埴輪を用いた祭祀跡と考えられ、埴輪自体の資料の良さと共に、極めて重要な史料的価値をもつものといえよう。本概報ではさらに円筒埴輪棺、鉄劍型銅劍、帶金具についても若干の研究を示した。今後もひき続き研究の課題としていきたい。

調査関係者名簿

財団法人鳥取県教育文化財団

常務理事 木村耕造（55年12月1日退職）、平木安市

事務局長 春田 明

中部埋蔵文化財調査事務所

所長 米原幸正

調査員 西村彰滋、笹尾千恵子、大賀靖浩、景山俊邦、福嶋慶純、山田宣彰、入川泰樹、国田修二郎

中村 徹、津川ひとみ、長岡充展、森原陽子、大谷増実（7月から東部埋文事務所へ）、坂本敬司（11月から東部埋文事務所へ）

近藤 滋、影山和雅、門脇豊文、南前孝明（7月から西部埋文事務

調査指導 所へ）

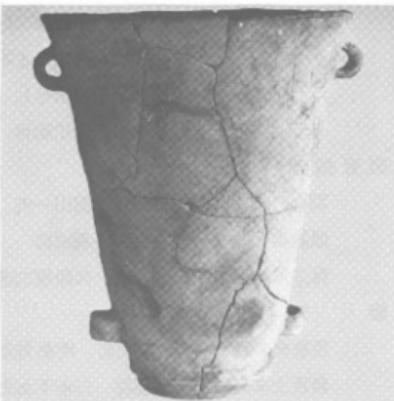
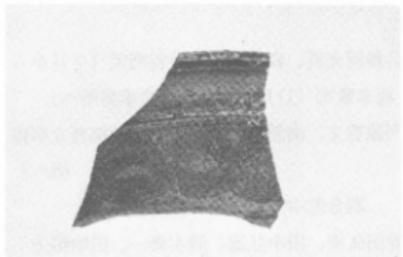
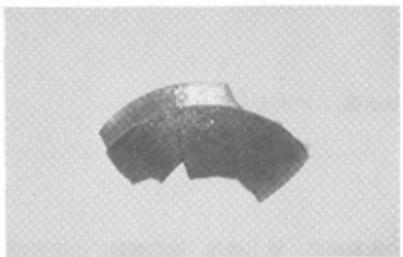
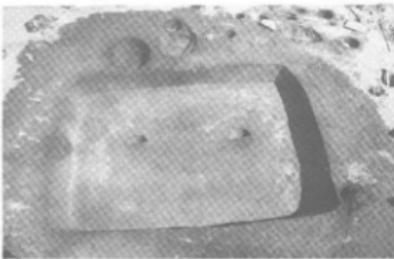
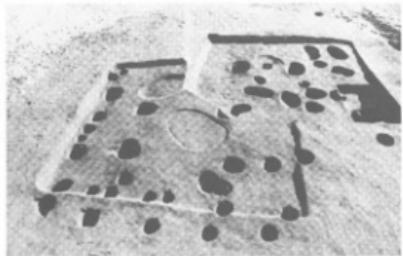
羽合町文化財保護委員長 国田一夫 羽合町中央公民館 安達幸範

県教委文化課 亀井照人、森田純一、野田久男、田中弘道、清水真一、田中精夫

県立博物館 山名 嶽、久保穰二朗

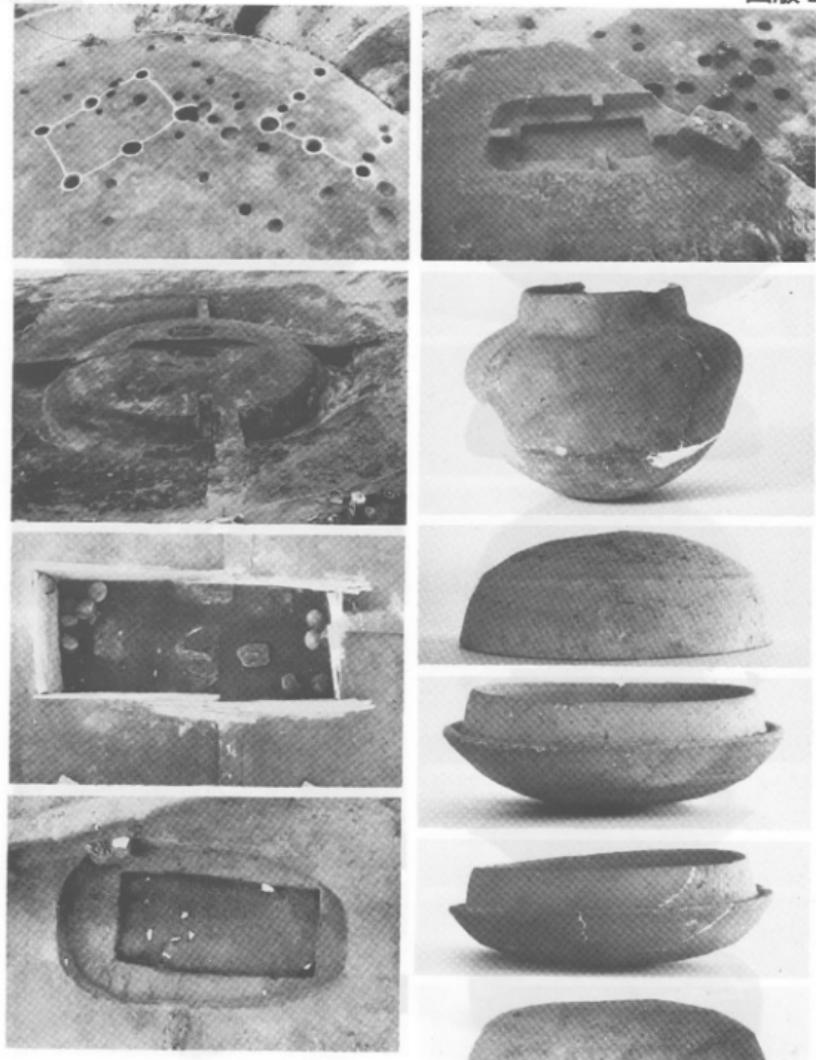
協力

鳥取県教育委員会、羽合町、町教育委員会、中央公民館、鳥取県土木部下水道課、倉吉土木出張所下水道課、日本下水道事業団天神川出張所、熊谷組、西松建設



左上から S 193、出土土器 P 05・6・7

右上から S 188、出土土器 P 01・3・2・8

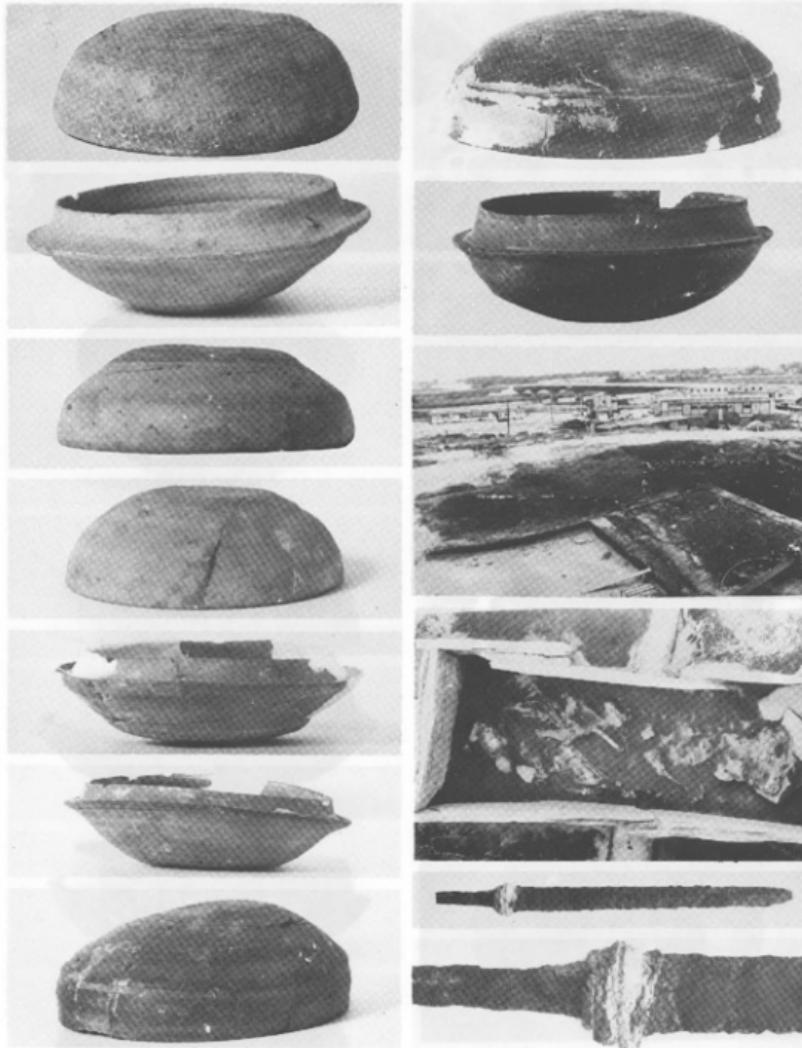


上から SB13、2号墳全景(北から)、第1

埋葬施設、第2埋葬施設

上から 第5埋葬施設、出土須恵器 P O 1 ·

4 · 5 · 10 · 11

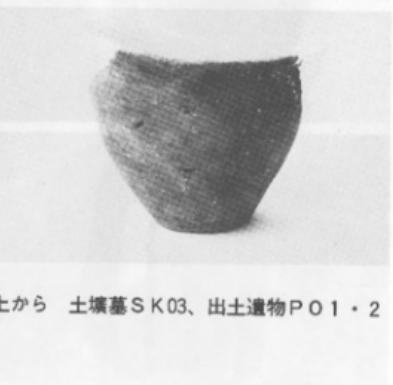
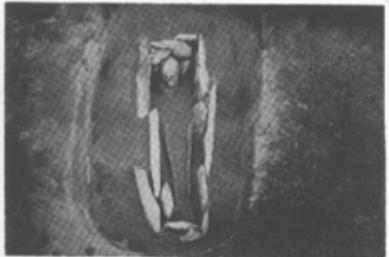
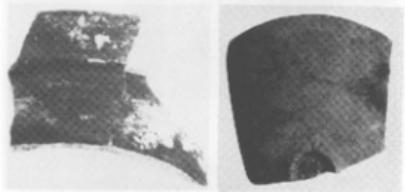


上から 2号墳出土須恵器 P 014・16・17・
18・19・21・23

・10号墳出土品 銀鏡裏面子面 云母土

上から 出土須恵器 P 024・27、26号墳、28
号墳箱式石棺、出土鉄剣、鹿角装具

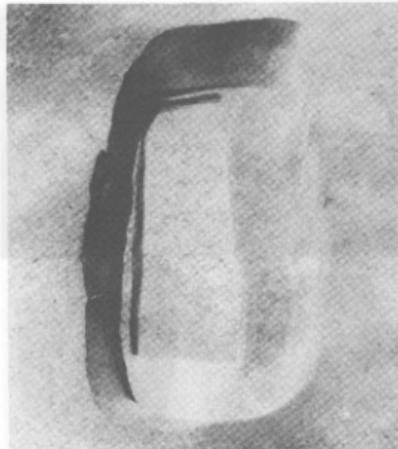
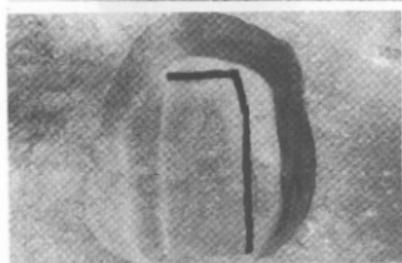
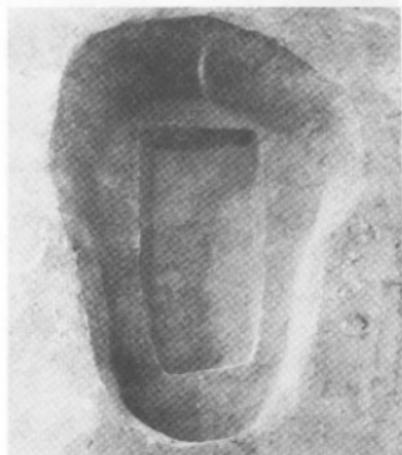
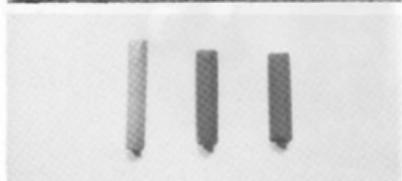
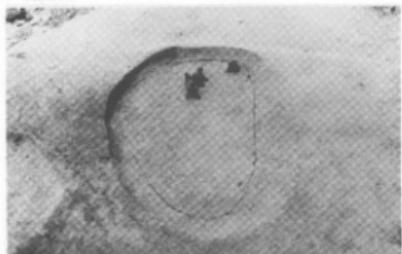
刀・鏡・鏡・手



上から 方形周溝墓 S X29、出土土器 P O

1・2、石棺墓 S X36、弥生前期土
壙墓群

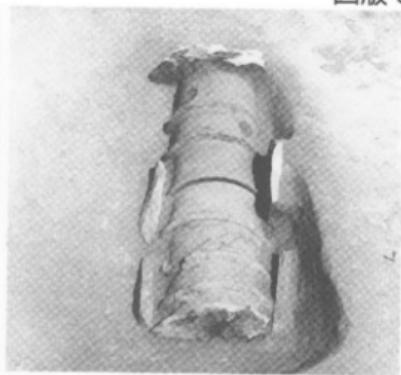
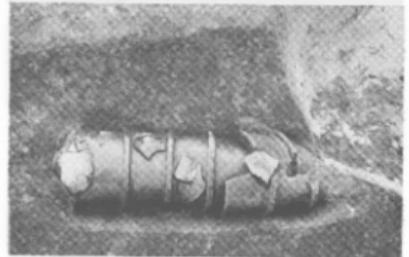
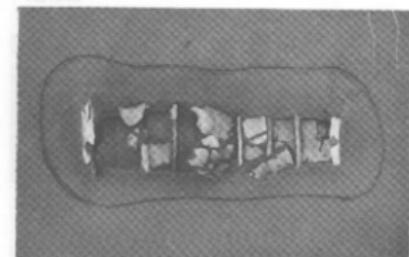
上から 土壙墓 S K 03、出土遺物 P O 1・2



左上より 弥生前期土壤墓 S K08、S K08遺物、S K15、S K12

右上より S K02、埴輪棺 S X31、帶金具表・裏

○弓器土出 S X2 墓陶頭底衣 ふち土
土頭筒主柄 S X2 墓頭舟 S X2
埴輪頭



上から 10号墳第3埋葬施設、埴輪棺S X31
使用円筒埴輪

上から 墓輪棺S X53、S X54、同、58号墳

第1埋葬施設

11. 銅鏡の張り表衣頭、腰帯腰袋、足袋土袋
是高麗朝時代のものと想定される



左上から 塙輪棺使用円筒埴輪 S X53 1・2、
S X54

右上から 発掘風景、前方後方墳26号墳、16
K埴輪群、小学生の体験発掘風景

80年度調査従事者

赤石二郎、青木伸二、青木勇人、秋村洋一、足立佐知子、足立政代、新 貞二、
新 静枝、池田知己、石井和利、石賀智子、稻坂進吾、稻坂ムメ、今市次郎、
岩崎綾子、岩本鶴代、植田 真、梅田フミ子、大場 茂、岡本 稔、尾高豊野、
尾谷梅子、勝田繁行、勝田 忍、加藤 一、河田 稔、川本晴夫、神崎さえ子、
北田敏宏、北田美由貴、絹見安明、木村良男、木山尚彦、小林 篤、酒井静江、
佐々木良江、佐々木浩、鹿田里美、杉原 寛、杉本春子、杉本容子、鈴木孝夫、
園 俊朗、高口勝人、高田則道、高橋絹子、高浜とし子、田熊 勉、竹内啓子、
立川圭子、玉田芳英、丹波千代子、薦原弘子、手島尚樹、土井俊子、徳島令子、
永見成人、西崎早苗、西崎裕一、西原高幸、西原信男、西原浩幸、野島珠美、
野津誠治、浜口幸吉、浜口みち子、浜本百合子、林 志郎、林八千代、原田佳幸、
東原辰哉、福島智恵子、藤田広子、藤村淳子、堀内幸子、本田経嗣、前田千鶴子、
前田朋子、増井藤吉、増田裕司、松尾崇江、松本 聰、三沢さよ子、三谷一志、
光井康代、光井芳子、宮本香代子、六尾由紀子、村川裕紀、村口静江、村口いつ子、
森田歳子、森田淑恵、山下晴彦、山田聰子、山田利江、山本英俊、山木理嘉子、
横山敦子、横山浩一、米沢真一、若狭嘉代治、若松高幸、故柚垣繼仁

土器編年は次のものに基づいた。

土師器「青木遺跡発掘調査報告書」I～III 青木遺跡発掘調査団 1976～8

須恵器「陶邑」I～IV 大阪府教育委員会 1976～9

なお本書の編集は福嶋慶純・景山俊邦があたり調査員・室内作業員全員が協力した。

長瀬高浜遺跡Ⅳ

天神川流域下水道事業に伴う
砂丘遺跡の発掘調査概報(3)

発行日 1981・3・31

発行者 財團法人鳥取県教育文化財団
〒680 鳥取市扇町21

鳥取県社会教育福祉会館内
TEL (0857) 27-5252(代表)

印 刷 勝美印刷株式会社鳥取支店
鳥取県東伯郡羽合町長瀬

210.2
Tot
(6)

図書館